

# オット・ヴァイニング『性と性格』——翻訳と解題

白坂 彩乃  
大川 勇

## 第十一章 エロースと美

女性を高く評価する根拠として繰り返し持ち出される議論は、まだいくつかやり残したことがあるものの、いまやおかた検証された。それらは、本研究がしかるべき理由から拠って立つこととした批判哲学の視点から反証されている。もちろん、人びとが議論のなかでこの確固とした基盤に赴いてくれる保証などない。シヨーペンハウアーのたどった運命がそれを物語っている。『女について』で彼が卑俗な考えを述べたのは、ヴェネツィアで一緒に散歩していた娘が、馬で駆け抜けていった見目麗しいバイロンに一目惚れしてしまったからだと言う人びとがいまだにいるのである。女性からまったく幸福を与えられなかった男は女性を悪罵するようになり、きわめて多くの幸福を与えられた男はそうはならないとでもいうかのように。根拠にたいして根拠で反論するのではなく、たんに女嫌いのレッテルを貼るという彼らのやり口は、実際のところなかなか有効だ。憎しみはけっして対象を客観的に捉えられない。だからある人がなにかを

否定的に評価したのはそれを憎んでいるからだと言つてしまうと、そのレットルを貼られた人は、不誠実で、不純で、信用できないという疑いをいつもすぐにかけられる。彼は激しく女性を拒絶することで、その拒絶に正当性が欠けているのをごまかそうとしているのだ、と。かくしてこのようなやり口は、女の問題には一切立ち入らないという彼らの目的、にかなったものである。それは女を理解しようなどと、思つてもいない大多数の男たちが用いる、じつに巧妙で効果的な武器なのである。だが理論的な議論をしているときに相手方の心理的な動機を引き合いに出し、証拠の代わりにそれを持ち出すというのは褒められた行為ではない。また、こんなことを理論的に教え諭すつもりもないのだが、客観的な議論のさいには双方が真実という、個人を超えた理念のもとに立たねばならないし、それぞれが顔のある個人として存在しているか、またどのように存在しているかに関係なく、結論に到達しようとすべきである。だが、一方が論理的な推論の手続きを守ってなんらかの結論を導き出しているのに、もう一方がその証明の過程自体には立ち入らず、結論だけに激しく反対してきたとしたら、厳密な演繹に言及しようとしなのは無礼だといって、場合によってはその人を当然罰してよいだろう。なぜかとも意固地になっているのかをはつきりと突きつけてやるのである。その理由が意識できたら、女性に荷担したいという願望に反した現実と突き合わせて自分で理由を客観的に考えるようになるだろう。ただその理由を意識できていないから、その人は自分自身を客観的に見ることができなかつたのである。それゆえ、これまで厳密で論理的かつ客観的な推論がなされてきたが、いま議論の矛先を逆転させて、女性を擁護する男たちについてここで論じておこう。彼らが必死になって女性の味方をするのはどのような感情に起因しているのか。それはどこまでが嘘のない動機から生まれていて、どこまでが怪しげな動機から生まれているのか。

女という性を軽蔑する者にたいする異議申し立てはすべて例外なく、彼らの感情としてはエロ、イ、ス、的、な、関、係、から発している。そこでは男は女性の側に立つのである。動物においては両性の関係はたんなる性的な、関、係、に尽きるし、人間に

おいても、性的な関係はその範囲の広がりからして動物よりはるかに大きな役割を果たしている。だがエロース的な関係は、性的な関係とは原理的にまったく異なるものである。性とエロース、性欲と愛——両者は結局は同じものではないと見なし、性や性欲を美しく飾り立て、洗練させ、霧で包み、「昇華」すればエロースや愛になるのだと考えるのは完全なる間違いである。だが医師たちは皆そうだと思ひこんでいるだろうし、カントやショーペンハウアーのような人物でさえも例外ではなかった。性とエロースがこのような際立った対立をなす理由を説明する前に、まずはこの二人について述べておきたい。カントの見解はまったく取るに足らないものである。彼以外の人間にはおよそありえないほど、彼は愛も性欲も知らなかったに違いない。彼はエロースを解さなかったため、旅に出たい、と思うことさえなかった。つまり彼は、こうした問題に權威として参加してもらうにはあまりにも高尚で、あまりにも純粹なのである。彼が復讐するほどの執着を見せた恋人は形而上学だけだった。そしてショーペンハウアーにかんじていえば、彼も高次のエロースを理解してはいなかったが、官能的な性の世界だけは知っていた。以下のように考えれば、そのことが簡単にわかる。ショーペンハウアーの相貌には善良さはほぼ見られず、冷酷さが溢れている（だがそのことに彼自身ひどく悩み苦しんでいたに違いない。よく同情を覚える人なら同情の倫理学など打ち立てないだろう。最も同情的な人間とは、同情している自分自身に最も嫌悪を覚える人間である。つまりカントとニーチェのことだ）。だが同情する素質に強く恵まれた人間だけが——もう言ってしまったていいだろう——エロースに身を焦がすことができるのである。「何者にも関わることのない」人間には愛は不可能である。サタンのような人だというわけではない。むしろ逆で、彼らは超然として道德的な高みに立つことができる。ただ彼らは、隣人がいま何を考えているか、あるいは隣人のなかで何が起こっているかがよくわからず、女との性を超えた関係についても理解することができない。同じことがショーペンハウアーについても言える。彼は極度に性欲に悩まされた人間だったが、けっしてだれかを愛することはなかった。そう考えなければ、

かの有名な「性愛の形而上学」がかくも一面的なものになっている理由も説明できないだろう。その核となる主張は、無意識ではあれあらゆる愛が最終目標としているのは「次世代の生産」に他ならない、というものののだ。

これから示していくように、こうした見解は間違っている。たしかに、官能から完全に自由な愛は経験世界には存在しない。どれほどの高みに立っていたとしても、人間はつねに感覚的存在でもあるのだ。だが重要なのは、そしてそうした見解を完膚なきまでに叩きのめすのは、いかなる愛もそれ自体、即自かつ対自に (an und für sich) ——つまり、禁欲的な原則によって初めてそうなるのではなく——両性の関係の持つ要素のうち性交へと駆り立てるものにはたいしては敵対的であり、それどころか、そうした要素は愛の否定そのものであると感じていることである。愛と性欲は異なった、絶対に両立しえない、それどころか対立する二つの状態であるため、本当に愛しているときには、愛する人との肉体的合一などまったく考えられないのである。恐れのもったくない希望などないが、だからといって希望と恐れが正反対のものであることは変わらない。性欲と愛も同様である。エロースを知れば知るほど、その人は性欲に煩わされなくなる。その逆もまた真である。たとえ情欲から完全に切り離された賛美が存在しないとしても、だからといって最も鋭く対立した位相にあるはずの二つのものを一絡げにしてはならない。人間的に豊かな者から順番に、高いほうの位相へと入っていくことができるのである。欲情しているのにその女性をまだ愛していると言う人は、嘘をついているか、さもなければ愛とは何かわかっていないのである。それほどまでに愛と性欲は異なっている。それゆえ結婚生活における愛の話を耳にしたときもほとんどつねに、そんなものは欺瞞だと思ってしまう。

それでもなお、まるで徹底的なシニシズムにでも取り憑かれたように、どちらも同じだと言ってきかない物分かりの悪い人は考えてみてほしい。性的な引力は肉体が接近しているときに増すが、愛は相手が不在であるときに最も強くなるということを。愛が生きながらえるためには別離が、いくらかの距離が必要だということを。そう、遠くの国へ旅を

することで真の愛が死ぬことはなかったとしても、どれほど時が流れても愛が忘れられることはなかったとしても、恋人と偶然、思いがけなく体が触れあつて性欲が目覚め、その場で愛を殺してしまうこともありうるのである。意識の高度に発達した卓越した男にとっては当然、自分が欲情する娘と、ただ愛するだけで欲情するなどありえない娘は、いつもまったく違った姿をしていて、歩き方も違えば性格も違う。それは二つのまったく異なる存在なのである。

だから精神医学の教授連が鼻で笑おうと、「プラトンのな」愛は存在する。むしろ、「プラトンのな」愛しか存在しないと言いたい。それ以外で愛と呼ばれているものはどれも雌豚の世界のものである。愛はただ一つだけ。ベアトリーチエへの愛、聖母への賛美だけだ。性交がしたいならバビロニアの娼婦がいるではないか。

カントの超越論的な観念の一覧表にいまも依拠することができるなら、そこにもう一つの観念を付け加える必要がある。純粹な、高次の、情欲のない愛、プラトンやブルーノの愛、これらもまた超越論的観念であろう。経験世界においてそれが完全に実現されたことがないとしても、その観念としての意義は揺らぐまい。

『タンホイザー』の主題はここにある。片やタンホイザー片やヴォルフラム、片やヴェーヌス片やマリーア。自分たちは本当に永遠だと信じた恋人たち（トリストランとイゾルデ）は初夜の床ではなく死の床に赴くが、これはゾルゲ・ノ・ブルーノの殉教と同様、人間のなかに高次のものが、少なくとも形而上学的なものがあることの絶対的証拠である。

高き愛、あなたのもとへと

響け、高揚したわたしの歌よ、

あなたは天使のように美しい姿で

わたしの魂のなか深く入ってゆく！

あなたは神からの使いとして来る<sup>きた</sup>

わたしは妙なる彼方よりあなたを追いかける——

そうしてわたしは到りつくのだ、

愛の星が永久<sup>とわ</sup>に輝く地へと。

\* \* \*

そのような愛の対象となるのはだれか？ 本書で描き出した女——存在に価値を付与するいかなる特質も持たず、自分自身の価値を求めようとしない女だろうか？ そうではあるまい。そのような愛で愛されるのは、この上なく美しい、天使のように清らかな女である。そうした女の美や純潔がどこからやってくるのか、それが次の問題だ。

女という性が本当に男よりも美しい性なのかについては何度も議論してきたし、さらに女を美しい性と呼ぶことそれ自体についても反論してきた。本章ではさしあたり、だれがどのような経緯で女を美しいと思うようになったのかについて、個別的に考えていくのがよいだろう。

周知のとおり、女は裸のときが最も美しいわけではない。もちろん、女が彫像や絵といった芸術作品で表現される場合には、一糸まとわぬ姿も美しいだろう。だが生身の女の裸はだれからも美しいと思われない。何かに美を見いだすには無欲な姿勢で観察することが不可欠であるが、性欲に駆られるとそれができなくなるからだ。だがその点は措くとしても、生身の女の裸は不完全で、いまだ自分の穴を埋めてくれるものを求めているという印象を与える。こうした特徴は美とは相容れない。女の裸を美しいという場合、それは全体としてというよりは、個々の部分において美しいのであ

る。そうした性質ゆえに、女は何かを求めているのだという感覚が生じるのは避けがたく、それゆえ快さよりも不快感を見る者に引き起こす。自分の内部ではなく外部に目的を持つているというこの特徴がいっそう際立つのは、裸の女が立っているときである。横になった姿勢の場合は、そうした印象は当然和らげられる。裸の女を描く芸術は、こうしたことをよく感得していた。裸の女がまっすぐ立っている、あるいは浮かんでいる姿を描くさいには、女を単独では描かずに、必ずその傍らに別の人間を配置した。彼らの目があるために、女は手で自分の裸を隠そうとすることができたのである。

しかし、たとえ女が可能なかぎり完璧に非の打ちどころなく女という性の肉体的な類型を体现していたとしても、個々の部分においても完全に美しいかといえ、そうではない。ここで理論的に最もよく取り上げられるのは女性器である。男から女への愛はすべて脳にまで昇ったただの射精欲にすぎないという見解がもしも正しければ——「背が低く、肩幅が狭く、尻が大きく、脚の短い性を美しい性と呼べるのは、性欲によって知性を曇らされた男だけだ。つまり、この性のなかにこそ、女の美のすべてがあるのだ」というショーペンハウアーの主張が正しければ——女性器こそ最も熱烈に愛され、女の体のなかで最も美しい部分と見なされるはずであろう。しかし、近年やたらとしつこく女性器の美を喧伝する、胸が悪くなるような輩についてはともかくとして——あえていえばそれこそが、女性器の美などというものを信じるためにはアジテーションが必要になることの証左であり、彼らが心の底では自分たちの主張を信じていないことを明るみに出してもいるのだが——そういう輩のことは措くとしても、女性器をとくに美しいと思う男などいない、むしろだれもがそれを醜いと感じる、と言つてよい。女のこの部分に特別に刺激されて官能的な欲望を感じる卑しい者もいるだろうが、そういう者でさえたとえ女性器がとても好きだと思つても、それを美しいとは思わないだろう。つまり、女の美はたんに性欲によつてもたらされるものではありえない。それどころか、女の美は性欲とは完全に対立して

いる。完全に性欲の支配下に置かれている男は女の美をまったく理解できない。その証拠に、彼らはだいたいの体つきでだけ品定めして、目にとまった女性ならだれでも見境なく欲情するのである。

女性器を醜く感じ、生身の女の体全体を醜く感じるという上述の現象が起る理由は、それらが男の恥じらしいの感情を傷つけるからということ以外にないだろう。現代の標準となった浅薄な人びとは、恥じらしいは衣服を着るようになったために生まれたのかもしれない、女の裸を拒むのは不自然で、そう感じるのはその人が女の裸を本当は卑猥な目で見てゐるからにすぎないのかもしれないなどと言う。しかし卑猥になってしまった男は裸を見てももはや恥ずかしいと思わないので、裸を拒むことはけつしてない。彼はただ欲情するだけで、もはや愛さない。あらゆる真の同情がそうであるように、あらゆる真の愛も恥じらしいを伴うものである。恥じらしいが欠けているといえるのは、愛を公にするときだけだ。そのとき人は自分の行為が心からのものであることを疑わないものだ。考えうるなかで、客観的に見ればこれこそ恥じらしいの欠如の最たるものであろう。ほくは恋い焦がれていますと口に出して言うようなものだ。前者は恥じらしいの不行為という觀念で、後者は恥じらしいのない饒舌という觀念といえよう。真の愛においてはどちらもけつして起こりえない。なぜなら真の愛はすべて恥じらしいを伴うものだからだ。嘘のない愛の表明はない。だが本当に女性たちはなんと愚かであることか。彼女たちがそのような愛の誓いをたびたび信じてしまふのを見れば、それがわかるだろう。こうしたことすべてに照らしあわせれば、女が美しいか醜いかという基準はつねに恥じらしいを伴う男の愛のなかにある。これは、真なるものが思考の基準となり、真理値こそが創造主である論理學とは異なる。また善なるものが當為の基準となり、善なるものの価値が善への意志の導きとなるべき倫理學とも異なる。これは美學の領域の話である。美學の領域においては、美は愛によつて初めてつくられるのである。美しいものを愛せよという内なる規範の強制が存在するわけではないし、愛されることを求める人間が美しくなるということもない（ただしそれゆえ、個人を超えた、それ

単体で「正しい」好みというものは存在しない。あらゆる美、それ自体は、まづもつて投影であり、愛したいという欲求の流出（Emanation）である。そして女の美も、愛とは異なるものでもなければ愛が向けられる対象でもない。女の美とは男の愛であり、両者は二つに分かれたものではなく、まったく同じ一つの事実なのである。醜さが憎むことから生まれるように、美は愛することから生まれる。そして愛と同じく美も官能的な衝動とはほとんど関係がなく、そうした衝動とは無縁のものだという点においても、この二つが同じものであることがわかる。美とは触れられないもの、不可侵のもの、他の何ものとも混じらないものである。完全に離れたところからでないと間近に感じる事ができず、近づけばすぐに遠ざかってしまうものである。女との合一を求める性欲は、女の美を壊滅させてしまう。触れられた女、所有された女は、もはやだれからも美しさゆえに賛美されることはない。

そろそろ二つ目の問いに答えてもよいだろう。女の純潔、女の徳性とは何か？

どんな愛が始まるときにも付いてまわるいくつかの事実を出発点とするのがいちばんよいだろう。すでに示唆しておいたように、肉体の純粋さは男においては一般に道徳心と誠実さの証しである。少なくとも、肉体的に汚れた人間がきわめて純粋な心根の持ち主であるということはこれまでほとんどなかった。だから普段は自分の体の清潔さに全然気を遣わない人たちでも、よりきちんとした性格の人間になろうと決心すると、これまでよりも頻繁かつ念入りに自分の体を洗うようになるものだ。またこれまで清潔にしていなかった人たちも、愛を持続させるために突然、心から清潔になりたいと思うようになるが、そういう時期は短く、往々にして人生のうちで一度しかやってこない。そのあいだは、下着の下の体も汚くは見えない。精神的な面にも目を向けると、愛しはじめるとともに自分を責めたり、苦行や贖罪を試みたりする人は多い。道徳的な省察が始まり、愛する人から内的な浄化の力が発しているようにも感じる。たとえ彼女と一度も話したことがなくても———それどころか、彼女を遠くから何度か見ただけだったとしても。愛される女自身が

原因でこのような愛の過程が生じるなどということはありえない。その女はただの小娘やうすのろ女、淫らな浮気女でしかないことがほとんどで、愛している者以外はふつうだれもその女に神々しい特性を認めることはない。だとすれば、愛において具体的な人間が愛されていると素朴に信じられるだろうか。むしろ具体的な人間というのは、愛というたぐいまれな大いなる運動の起点としての役割を果たしているだけではないのか。

あらゆる愛において、男は自分自身しか愛さない。ただそれは、自分の主観を愛するということでもないし、あらゆる弱さや卑しさ、あらゆる鈍重や偏狭のまわりついた存在としての現実の自分を愛するということでもない。彼が愛するのは、完全にそうなりたいと望み、そうなるべき自分である。最も自分に固有で最も深い叡智的な存在を、あらゆる必然性の切れ端やあらゆる地上的なものの塊から自由な存在としての自分を愛するのである。男は時間と空間のなかで生きているため、その存在には感覚による制約という滓が混じっている。それは純粹で光り輝く原型として存在しているわけではない。たとえどれだけ自己のなか深く潜ろうとも、そこにいるのは濁り汚れた自分で、彼が求めるものは見いだせない。それがあるのは真つ白で染みひとつない純粹さの中なのだから。それでも彼がどうしても必要とし、切望するのは、他の何ものでもなく完全に自分自身になることだけである。しかし彼が求めるただ一つのものであるその目標を、自分自身の存在の根底に、まばゆい光に包まれた不動のものとして見ることはない。それゆえより簡単にそれを追求しようとするなら、彼はそれが自分の外部にあると考えざるをえないのである。彼は絶対的に価値ある存在といふ、自分の理想を投影する——だれか別の人間に。人間を愛するということこそそういうことであり、それ以外ではない。罪を犯し、しかも自分が罪を犯したと感じている者だけに、このおこないは可能である。それゆえ子供はまだ愛することができない。愛はまず第一に、あらゆる憧憬が向かう、つねに到達不可能な最高の目標を——まるでそれが経験世界のどこかで現実化されていて、アイデアの世界にしか存在しないわけではないかのように——描き出す。そして愛

はその目標を隣人に限定しながらも、同時に、愛する者自身のなかでは目標の達成という理想がまだ遠いことを示す。ただこの二つの理由ゆえに、愛とともに浄化への努力が、目標に到達したいという願望が新たに湧き起こるのである。その目標となるのは最高次の精神的な存在であり、よって愛する人に空間的に接近して肉体的に不純になることを許さない。それゆえ愛とは価値への意志が最も高度かつ強く表れたものであり、それゆえそこには地球上の何よりも、人間の本来的なあり方が現れている。精神と肉体の、官能と道徳のあいだに呪縛され、神性を持っていたかと思えば動物でもあるのが人間だ。ともかくも人間は愛を知って初めて本当の自分になれる。かくして多くの人間は、だれかを愛してはじめて固有の我と、自分とは違う汝がいることを信じるようになる。かねてから示されているように、両者はたんなる文法的な相関概念ではなく、倫理的な相関概念でもある。かくして、どんな愛の関係においても互いの名前を呼びあうことが大きな役割を果たすということも理解できる。かくして多くの人間が、愛して初めて自分は固有の存在なのだと知り、自分は魂を持っているという確信によりやく満たされるのもうなずける。かくして、愛する者はたしかに自分が近づくことで愛する女をけつして穢したくないとは思っているが、相手の（そして自分の）存在を確かなものにしようとして、彼女を遠くから見ようとするのが往々にしてある。かくして、頭の固い経験論者でも、愛を知ると熱狂的な神秘主義者になることが少なからずある。実証主義の父オーギュスト・コントがそのいい例である。彼はクロティルド・ド・ヴォーと知りあつてから、これまでの思想全体を覆してしまった。芸術家だけでなく人間一般にとつても、「我愛す、ゆえに我あり」という心理学的命題が当てはまるのである。

このように、愛は憎しみと同様に投影現象であつて、友情のような同一化現象ではない。友情は二人の個人が同等の価値を有していることを前提とする。愛はつねに二人が異なること、それも価値が異なることに基づいている。その人自身が望んではいらぬものの完全には実現できないものすべてを一人の個人のうえに積み上げて、その人をあらゆる価値

の担い手とすること——それが愛するということである。こうした愛の極致の象徴が美である。それゆえ、美しい女のなかにあるはずの道德がないことがわかると男は驚き、それどころか青ざめる。そして「かくも美しい肉体」のなかに「かくも多くの不道德」が宿りうるのかと、自然のペテンをなじる。だが彼は、女がまだ美しく見えているのはただ自分がその女をまだ愛しているからだと考えもしない。さもなくば、女性の内面と外面の不一致に苛まれることなどとはやないだろう。下品な路地裏の売春婦は、価値を投影することが最初から不可能であるため、けっして美しく見えることはない。そういう女はひどく低俗な人間の好みしか満足させられず、不道德この上ない男やひもと呼ばれる男に愛されるだけである。ここには、道德的なものと対立している関係が現れているように思われる。しかし女一般は倫理的なものすべてにたいして無関心なだけであり、無道德なのである。それゆえ、だれからも本能的に嫌われる反道德的な犯罪者や、だれからも醜いと思われる悪魔とは異なり、男からの価値の譲渡という行為が拠つて立つ基盤を与えることができる。女は善いこともしなければ罪を犯もしないので、男の理想が自分に結びつけられることにたいして抵抗するものが何もない。女の美はただ目に見えるようになった道德性であるが、この道德性はそれ自体男のものであり、最高度まで高めて完成させた道德性が女へと移し替えられたものである。

およそすべての美は、何度も繰り返された、最高の価値を具体化する試みであるため、すべての美的なものを前にして「その美を見いだした」という感覚に襲われるし、美に向きあうとどんな情欲も利己的な興味も沈黙する。人間が美しいと思う形式はすべて、道德的なものや観念的なものを感覚的なものに置きかえるという美の機能によつて、最も高次のものを目に見えるかたちで実現しようとする、何度も繰り返された人間の側の試みである。美とは目に見える世界における完全性の象徴である。それゆえ美は不可侵であり、それゆえ動的ではなく静的であり、それゆえ美に向きあう態度が少しでも変化するとそれだけで美は消失し、美の観念も減ぶ。自分自身の価値への愛や完全性への憧憬は、物質

のなかに美を生み出す。そのようにして自然の美も生まれる。犯罪者はけつして自然の美を感じることがないが、それはまさに倫理が初めて自然をつくったからである。かくして自然はつねにそして至るところで、その最大の姿から最小の姿にいたるまで、完成されたものという印象を呼び起こすとされる。かくして、自然法則もまた道德律の感覺的な象徴にすぎない。自然の美は魂の高貴さの具体化なのである。かくして論理は現実化された倫理である。愛が男のために現実の女とは異なる新たな女をつくり出すように、万象のエロースである芸術は混沌から宇宙における形式の豊かさを生み出す。そして自然の美が形式や自然法則なしには存在しないように、形式のない芸術も、規則に従わない芸術の美も存在しない。自然法則が道德律を體現したり、自然の合目的性が、人間精神のうえにその原型が君臨している調和を體現したりするのと同様に、自然の美は芸術の美を體現しているのだから。もちろん自然は芸術家から永遠の師と呼ばれているが、それは芸術家自身によつてつくられた彼の創作の規範であり、觀念の集積としてではなく、具象的な無限としての規範である。一例を挙げれば、数学の定理は現実化された音楽であり（その逆ではない）、数学自体は音楽を、自由の世界から必然性の世界へと移した等角写像である。それゆえあらゆる音楽家の當爲は数学的なものである。すなわち芸術が自然をつくるのであり、自然が芸術をつくるのではない。

ここまで概略を示してきたことは、少なくともその一部は、カントやシェリング（そして彼らの影響を受けたシラー）の深遠な芸術思想をさらに發展させた説明となつてゐるが、さて、ここで本題に戻ることにしよう。これまで追究してきた結果明らかになつたのは、女の道德性というものが信じられてゐるのは、男の魂の女のなかへの「取り入れ」（Introjektion）のためであるということ、女の見た目が美しいのもそれとまったく同じ理由であつて、見た目の美しさは道德性が具体的に表現されたものにすぎないということである。それゆえ、道德的な意味で「美しい魂」について話したり、シャフツベリやヘルバルトのように倫理学を美学の下位に置いたりするのはわからないでもないが、

真の関係を逆転させてしまっている。ソクラテスやアンティステネスを持ち出して美しきもの (το καλόν) と善きもの (τὸ ἀγαθόν) を同一視してもよいが、美とは道徳が現前して肉体を伴った姿であり、すべての美学は倫理学の被造物にとどまるということを忘れてはならない。こうした受肉の試みのうち、時間的に有限な個別的なものとはどれもその性質ゆえに幻影である。それは実現された完全性を装っているだけなのだから。それゆえ個々の美しいものはかない。女への愛も、老女が美しくないことには同意せざるをえないため、はかない。美の観念が自然の観念であり、観念はたとえ個々の美しいものや個々の自然の事物がすべて消え去っても永遠に残るものである。有限で具体的なものの中に完全性を見いだすのは幻覚にすぎず、愛する女のなかに完全性を見いだすのは錯覚にすぎない。女への性欲を超えていくために、美への愛は女への愛に溺れてはならない。人間への愛がすべてそうした混同に基づくのであれば、不幸でない愛などありえない。だがすべての愛はこの錯誤にしがみつく。愛は何の価値のないものの価値を主張する、なんとも英雄的な試みなのである。無限の価値への愛、それは絶対的なものへの、つまり——無限ではあるが具体的な自然全体の美への愛（汎神論）という形をとつていようと——神への愛であるが、それだけが愛の超越的観念と呼べるのかもしれない（そんなものがあればだが）。あらゆる個々のものへの愛、また女への愛は、それだけですでにその観念からの離反であり、罪なのである。

人間がどうしてこの罪を背負っているかについてはすでに述べた。あらゆる憎しみが、自身が持っている忌まわしい特性を別の人間に投影して、自分のなかにあったときよりもいつそうおぞましい特性として言挙げすることではないのと同様に、また悪魔なるものが、厭わしい衝動を自分以外の人間のなかに生じさせるために、そしてそれと闘うための誇りと力を手に入れるために考え出されたのと同様に、愛もまた、善を思想として自分ひとりで、掴みとる力のみだない人間が、善を手に入れるべく闘う苦しみを軽減するという目的しか持たない。それゆえ憎しみと愛は、どちらも

臆病さの表れである。憎しみにおいては、憎しみの対象となる悪は自分のなかから引き出してきたもので、他でもない自分自身の心のなかに巢食っているのだと認める代わりに、自分はほかのだれかに脅かされていて、むしろ攻撃される側の無辜の人間なのだというふりをして自分を偽る。悪人をでっちあげ、インク壺をそいつの頭に投げつけて満足するのである。悪魔信仰が非道德的なのは、それが闊いの苦しみを軽減するための許しがたい捏造であつて、罪の転嫁だからということに尽きる。憎しみにおいて自分のなかの無価値なものの觀念が相手に移し入れられるように、愛によつて人は自分のなかの価値あるものの觀念を、それを受け入れるにふさわしいように見える存在のなかに移し入れる。その結果サタンは醜くなり、愛する女は美しくなる。かくして人はどちらの場合においても、善と悪を對置させ、それを二人の人間に振り分けることで、より簡単に道德的な価値のために燃えたつようになる。しかし觀念ではなく個々の存在への愛すべてが道德的な弱さの表れなのであれば、その弱さは愛する者の感情にも現れてくるにちがいない。罪の感情を持たずに犯罪を犯す者はいない。愛が最も恥じらいを伴う感情であるというのはいわれのないことではない。愛には同情よりもはるかに恥じらひを感じる理由がある。私が同情する人間は、私から何かを受けとる。同情という行為はそれ自体、私が相手に自分の想像上の、あるいは本當の富から何かを与えることだ。施しとは、すでに同情のなかにあるものをただ可視化したものにすぎない。だが私が愛する人間は、私から何かを要求される。私は少なくとも、彼女が醜い身ぶりや卑しい表情によつて私の愛の邪魔をしないでほしいと思う。というのも、自分自身をどこまでも探し求める代わりに、愛によつて私はどこかに自分自身を見いだしたいからだ。私は隣人の手から、他でもない自分自身を受けとりたいたのだ——愛する人に、自分を求めているのだ！

相手を自分よりも低く見ておとしめるから、同情は恥じらひを伴う。自分を相手よりも低く見るから、愛は恥じらひを伴う。愛していると個人としての自尊心はすべてこの上なく失われるが、それが愛の弱みである。それゆゑ愛はみず

からを恥じる。そのようにも同情と愛は似通っていて、同情を知る者だけが愛を知ることがそこからわかる。だがこれらは両立しない。同情の対象となる人間を愛することはけつしてないし、愛する人間に同情することもけつしてない。同情においては自分自身が確固とした軸となるが、愛においては相手が軸となるからである。両者の情動の方向や正負の符号はまったく逆である。同情においては私は与える側であり、愛においては乞う側である。愛はあらゆる懇願のなかで最も恥知らずである。それは最大の、そして最高のものを欲しがるのだから。それゆえ自分が何を本当に欲しがっているか、配慮に欠けた相手によって意識させられると、たちまちのうちに自尊心を取り戻して、突如復讐の鬼と化するのである。

エロースはすべて罪の意識にあふれている。嫉妬をすれば、愛がどれだけ不安定な地盤の上に成り立っているか白日のもとにさらされる。嫉妬はあらゆる愛の裏面であり、愛がまったくの不道徳であることを暴く。嫉妬すること、隣人の自由意志にたいして暴力がふるわれるのである。嫉妬がそのようなものであることは、まさに本書で述べてきたことからも容易に理解できる。愛することによって純粋な自己が相手のなかに閉じこめられ、そしていかにも犯しやすい誤った判断から、その自己にたいして時と場所を選ばず自分の権利を主張できているのである。嫉妬は恐れで満たされていて、そして恐れ（それは恥じらいとよく似ている）<sup>(3)</sup>は過去に犯した罪とつねに関係があるのだから、それだけですでに嫉妬は、このような手段で要求してはならないものを愛の名で手に入れようとしたことを露呈するのである。

愛において人間が背負う罪は、私が先ほどあらゆる愛の前提であり条件と呼んだ罪の意識から解放されたいという願望である。犯した罪をすべて自分で引き受けたり、これからの人生をかけてその償いをしたりする代わりに、愛は自分の罪から逃れてそれを忘れようとし、そうして幸せになろうとするのである。完全性の観念を自分で実現しようとする

代わりに、愛はその觀念がすでに實現されたものとして現れるのを望む。愛は奇跡がすでに他のだれかのなかで（それが愛の最も巧妙な策略なのだが）起こっているのだと見せかける。だがそれは、そうやって闘わずして、悪から解放されたいという願望にすぎない。このため、あらゆる愛は救済の欲求と深く関わっていることがわかる（ダンテ、ゲーテ、ヴァーグナー、イプセン）。愛はすべてそれ自体、救済の欲求にすぎず、救済の欲求はすべて非道德的である。愛は時間を飛び越え、因果律を乗り越える。自分では何もしないのに、愛は一足飛びに純粹さを手に入れようとする。それゆえ愛は内部ではなく外部からもたらされる奇跡であり、内部においては不可能である。そして愛は——とりわけ、自分の力で本来ならじつに途方もなく愛することができはずの人びとのもとでは——けつして目的を果たすことはない。愛は善を求める闘いを最も強く後押ししてくれるように思えるため、最も危険な自己欺瞞である。凡庸な人間は愛によって初めて自分が高められたと感じるだろう。だがより鋭敏な良心を持つている者は、愛のまやかに屈しないよう用心するものである。

愛している男は愛する女のなかに自分の魂を探す。その限りにおいて愛は自由であり、第一部で扱ったたんなる性的引力の法則に支配されていることはない。というのも、たとえ肉体的にあまり美しくなくても、性的な補足相手ではなくても、女性の心的な生が男による理想化をいとまずく受け入れると、その生は影響力を持ち、愛を進展させるからである。だが、その生がああ「価値の移し入れ」（Einlegung）とあまりにはつきりと異なっているなら、それは愛の可能性を壊滅させてしまうのだ。とはいえ、たしかに性とエロースは鋭く対立しているが、両者が類似しているのも紛れもない事実である。性は快樂と肉体的な子を手に入れるために女を手段として利用する。エロースは価値を——精神的な子を、精神的な生産を手に入れるために女を手段として利用する。低劣な性欲が種の存続に向けられているように、愛もまた美しい者ではなく、美しい者のなかに子を産みつけることに、精神的な不死に向けられているとプラトン

のディオティーマは言っている。これはほとんど理解されていないように思われるものの、極めて深い意味を持つ言葉である。肉体的な父も精神的な父も、子のなかにただ自分自身を見いだそうとする。自分自身の理念の具体的な実現こそ愛の本質を成すものであり、それがまさに子なのである。それゆえ芸術家は、芸術作品をつくり出すためにとかく女を探し求める。「ホメロスやヘシオドス、ほかのすばらしい詩人たちに目を向けて、彼らが不朽の作品を生み出し、自分たちの名を永遠に後世に遺したことを少なからず羨ましく思ったときには、だれもが自分もそのような子を生み出したいと思うでしょう……。あなたたちは、法を生み出したソロンのことも尊敬していますね。そしてまた別の、ヘレネスの住む場所やバルバロイの住む場所にも、多くのすばらしい作品をつくり出した人や、徳のあるさまざまなおこないをした人たちがいます。彼らが遺した子を讃えるために、すでに多くの記念碑も建てられています。ですが、人間の子のために記念碑が建てられたことはいまだありません」。

精神的な生殖能力、精神的な生産、あるいはプラトンのいう精神的な子についてさらに深く語ろうとするなら、こうした言い回しをただの形式的な類似だと見なしたり、言葉のうえでの偶然の一致にすぎないものを過大評価しているのだと考えたりしてはならない。肉体の性が、有機体が自分自身の形式を永遠に打ち立てようとする試みであるように、いかなる愛も根本においては、自分の魂の形式を、つまり個性を、永久に現実のものにしようとする試みにすぎないのである。ここには、自己の永遠化へのあらゆる意志（性とエロースの共通点をそう呼ぶこともできよう）を子と結びつける回路がある。性欲と愛はどちらも自分自身を現実化する試みである。前者は肉体的な似姿をつくることで個人としての自分を永遠のものとし、後者は精神的な似姿をつくることで個性としての自分を永遠のものにする。そして天才だけが完全に非感覚的な愛を知っている。自分の内奥の精神的本質が表出した、時間を超越した子を生み出すことを求めているのは天才だけである。

両者の類似をさらに追究することもできよう。ノヴァーリスを嚆矢として、あらゆる性欲には残酷さに通じるものがあると繰り返し言われてきた。この「連想」には深い理由がある。女から産まれたものはすべて死ななければならぬ。生殖、誕生、死は切り離せない関係にある。時ならぬ死を前にして、どんな生き物も繁殖の欲求としての性欲が最も激しく目覚める。それと同様、性交もまた殺人に通じるものがあるが、それは行為として心理学的に似ているだけではなく、倫理的・自然哲学的観点からもそっくりなのである。性交は女を否定する、のみならず男をも否定する。それは原理的に言って両者から、子を産むのだという意識を奪い取るものなのである。そのようにして産まれたものはいずれ逝かねばならないというのは、倫理的な世界観からすれば当然のことである。しかし最底辺の性だけではなく最高次のエロースも、女を目的それ自体としてではなく、愛する男たちの自我を純粹に発現させるという目的のための手段としてつねに利用するだけである。芸術家の作品はどれも、さまざま段階にとどめおかれたその人の自我でしかない。芸術家はそれ以前に、その自我を多くの場合、あるときはこの女、またあるときは別の女のなかに（たとえ想像上の女であっても）投影していたのである。

だがその際には、愛された女の実際の心理はつねに等閑に付されている。男が女を愛するとき、彼には彼女の実態が見えていない。理解こそ人間間の唯一道徳的な関係であるのに、愛するとき、男は女と理解しあう関係に入らない。人はその人となりを知り尽くした人間を愛することはできない。人間にどうしても付随する不完全さが目についてしまうからだ。愛が向かうのは完全なものだけなのだ。それゆえ女への愛が可能なのは、実際の特性やその女自身の願望や関心が、彼女のなかに移された高次の価値と矛盾してしまふ以上、それらを無視して、身勝手にも女の心的な現実をまったく別の現実置きかえてしまふ場合だけである。女のなかにただ女を見る代わりに自分自身を見いだそうとする試みは、経験世界の人間を無視しないかぎりはない。そのためこの試みは女にたいしてひどく残酷である。そしてそ

ここにこそ、あらゆる愛のエゴイズムの根がある。それは嫉妬においても同様であり、嫉妬する男は女を自分に従属する所有物としか見なさず、彼女の内的な生をもはやまったく顧みないのである。

これで、エロースの残酷さと性の残酷さが類似していることについては完全に示された。愛は殺人である。性欲は肉体的な女を否定し、エロースは心的な女を否定する。低劣この上ない性は女のなかにオナニーのための器官、もしくは子を産むための道具しか見ない。女の不妊を責め立てること以上に女にたいして卑しい振舞いはないし、不妊を離婚の法的根拠として挙げる条項以上に浅ましい所見は民法にはない。しかし高次のエロースも女性にたいし、自分の崇拜の欲求を満足させてほしい、自分の理想が実現されているのを見るためにできるかぎりおとなしく愛されてほしい、精神的な女と一緒に生ませてほしいと無慈悲にも要求する。かくして愛は反論理的である。それは女の客観的眞実と実際の性質を無視するからである。愛はみずからの意志で思考を欺き、理性を騙すことを切に望むのだ。だがそれだけにとどまらず、愛は女にたいして反論理的でもある。愛は女に偽りと見せかけを、彼女自身とは何の関係もない願望と完全に一致することを高圧的に押しつけてくるからだ。

エロースは女性を、闘いの負担を軽くするためにしか利用しないのである。エロースが女性に望むのはつねに、男がより容易に救済へと至るための足場となる太枝を与えてもらうことだけである。かくしてポール・ヴェルレーヌはこう告白する。

穢れなきマリアよ、愛の本質よ、

心からの揺るぎない信仰の論理よ、

あなたを愛しているならば、なすことができない善などあるだろうか。

天国への扉である、ただ一つの愛であなたを愛するならば。

そしてゲーテの『ファウスト』では、さらにはつきりとう語られる。

けっして触れることのできないあなたよ、

誘惑されやすい者たちが

安楽を求めてあなたのもとにやってくるのは

禁じられてはいない。

弱さのなかへと引きさらわれた

彼らを救うのは困難だ。

自分の力で欲望の鎖を

だれが引きちぎるだろう？

私は、最高次のエロースである聖母、崇拜に英雄的な偉大さがあるのを見誤っているわけではない。ダンテの名で記されたあの出来事の非凡さに、どうして目をつぶることができようか！ この最も偉大な聖母崇拜者は生涯かけて途方もないほどの価値を女に譲り渡しているため、現実の女のあらゆるあり方に逆らって価値を贈り与えたそのディオニュソス的な意地さえ、なんとも涙ぐましいくらい崇高だと感じてしまうほどである。あらゆる憧憬の目標となるものの具現

を一人の地上的かつ有限な人間、しかも一目見ただけの九歳の少女——成長してクサンティッペになったかもしれないし、肥え太った女になったかもしれないのに——のなかに見いだしたのは、彼が自分自身に無関心だったからだと思われる。そしてそれは、時間に制約された個人を乗り越えていくあらゆる価値を、それ自体としてまったく価値のない女に投影する行為であり、そのプロセスの本質を暴いてそれを批判することは容易ではない。だが、いかなるエロースも、最も崇高なエロースでさえも、依然として三重の意味で不道德なのである。一つには、経験世界の実際の女性にたいする狭量なエゴイズム。自分自身を引き上げてもらうという目的のための手段としての女性性是利用され、それゆえ自立した生を認められない。さらには自分自身への裏切り、自分自身からの逃避、別の場所への価値の流出、救済願望、それゆえの臆病、弱さ、尊厳の喪失、そう、まさに完全なる非英雄主義。そして最後に、真実を前にしての臆病。真実は愛の策略に逆らうから邪魔になる。真実は安楽な救済に至る可能性を消し去るがゆえに耐えがたいのである。

この最後の不道德こそ、まさに女についてのありとあらゆる啓蒙を妨げているものである。それは啓蒙を遠ざけるため、男はいつまでたつても女それ自体は無価値だと認識することができない。聖母は男の手になる創作であり、そのような女は現実にはいない。聖母崇拜は道德的ではありえない。それは現実から目を背けさせ、愛する者に自己欺瞞を強いるからである。ここでいう聖母崇拜、つまり偉大な芸術家の聖母崇拜は、いかなる点においても女の完全なる改造であり、それが可能なのは女性の経験の事実をまったく顧みないときだけである。価値の移し入れはもっぱら美しい肉体に誘発されて起こるが、そのさい、この美が象徴しているはずのものと際立った対立をなす女性の実情は何の役にも立たないのである。

このように現実とは異なる女を新たに作り出す目的について、言い換えれば愛が生まれるもととなる欲求については、詳細な分析が十分になされた。それは同時に、男が女にとって不都合な真実にたいして繰り返し耳をふさぐ主たる

理由でもある。彼らにとつては、女が「恥じらい」を持っていると固く信じ、女の「やさしさ」に魅了され、少女が目  
を伏せるさまこそすぐれて道徳的だと考えているほうがよいのである。こうした嘘もろとも、自分をもっと高揚させる  
という目的のための手段として女を利用する可能性を捨ててしまうよりも——つまり、自分の救済の道を残しておくこ  
とを断念するよりも。

したがって本章の冒頭で提起した、女の徳というものがなぜかくもかたくなに信じられているのかという問いの答え  
もここにある。女を自分自身の完成という理念のための器にすることも、その理念が女性のなかですでに実現されてい  
ると考えることも、男はやめようとしなない。それは女を最高の価値の担い手に仕立て上げること、自分の精神的な子  
をより容易に生みだし、よりよい自己を実現するためののである。愛する者のあり方が創造する者のあり方とじつによ  
く似ているのはいわれのないことではない。両者に共通しているのは、生きとし生けるものすべてにたいする飛びぬけ  
て大きな善意と、個々のあらゆる瑣末な価値にたいする無関心である。それは創造力のある人間と同様、愛する者を際  
立った存在にしているものであるが、しかし無価値な物質の世界こそが唯一の現実である俗物にとっては目的のための  
手段としての女性が必要となるため、そうしたあり方はつねに理解できないばかりかたものなのである。

というのも、エロースに生きた偉大な男はだれもが天才であり、天才はみな根本的にはエロースの人なのだから。た  
とえ彼の価値への愛、つまり永遠への愛、宇宙への愛がひとりの女の肉体へと向かわないとしても、自己の世界にたい  
する関係、主体の客体にたいする関係は、男の女にたいする関係をいわばより高く広大な圏域において繰り返したもの  
であり、いやむしろ、男の女にたいする関係はそれら二つの関係の特殊な例なのである。感覚の集合体が客体へと作り  
変えられるように（ただしその変化はただ主体の手によって、主体からのみ生じる）、経験世界の女はエロースの世界  
の女によつて消滅させられる。認識の欲求が、変わることなくそこに自分だけを見いだせる事物への憧憬に満ちた愛で

あるように、狭義の愛の対象も愛する者自身の手によって初めて創造される。彼はつねに愛の対象のなかに、ただ自身のもっとも奥深い本質のみを見いだすのである。かくして愛する者にとって、女への愛とはたとえ話のようなものである。たしかに中心にあるのは女への愛だが、それは無限が人称変化したものなのだ――。

いま一度問おう。このような愛を知っているのはだれか。男だけが性を超越しているのか、あるいは女にも高次の愛は可能なのか。ここまで述べてきたことからいったん完全に離れて、ここからは経験をもとに一から答えを導き出そう。経験から明らかなのは、外見上は、そう見えないことを差し引けば、Wはただ性的なだけでありそれ以上のものではないことである。女性が求めるのは性交か子供だけであり、どちらをより多く求めるかの違いしかない（だがいずれにせよ、女性は結婚を求めている）。当代の女性の手になる「愛の抒情詩」はまったくエロースが感じられないばかりか、極度に官能的である。女性たちがそうした作品を臆面もなく発表するようになってからまだ日が浅いが、彼女たちはこの点において、これまでのすべての男以上に大胆なことをやってのけた。その作品はおそらくどんな好色な期待をも満足させることができ、「独身男の読み物」にリストアップされかねないほどである。そこには、愛した相手に近づいて穢してしまうことを恐れるといった純粹無垢な愛情はまったくない。描かれるのはひどく猛り狂ったオルギアの放縦と野性そのものの情欲でしかなく、かくしてこうした文学の本来的な役割とは、ひたすらに性的でエロースを解さない女の本性に眼を開かせることにあるのだろう。

愛だけが美をつくり出す。女性は美と何らかの関係を持っているのだろうか。女性がよく言う「あら、男がどうして美しくなる必要があるのでしょう」という言葉は、ただのお愛想ではない。女性が男に、どの色が自分のドレスにいちばんよく合うか尋ねるとき、それは男へのただのおもねりではないし、男の虚栄心をくすぐることを当てこんでいるだけでもない。彼女は、色が美的な作用を及ぼすように自分で考えて選ぶことができないのである。服を選ぶときさえ、

女性は男の助けがないと（美的感覚ではなく）趣味にもとづいて決めることしかできない。もし女性のなかにいくばくかの美があり、心の奥底にもともと美の基準が備わってさえいれば、男から「君は美しい」という言葉をたえず引き出そうとはしないだろう。

かくして女性は本来の意味で男を美しいと思うこともできないし、この言葉を振りまけば振りまくほど、自分たちが美の観念とは無縁であることが明るみに出る。人間の恥じらいを見積もる最も確かな基準とは、その人が「美しい」という言葉を、自然の事物へのこの愛の告白を、どれくらい頻度で口にするかである。美に憧れているならば、その女性、は美の名をめったに口にしないだろう。だが彼女たちは美への欲求も持たなければ、持つこともできない。そういう意味で彼女たちに働きかけてくるものといえ、社会的にきれいだと認められた外見だけである。だが、好まれているものが美しいというわけではない。そのように定義されることがあまりにも多いが、それは間違っているし、言葉の意味と真つ向から対立する。好まれているのはきれいなものだ。だが美しいのは、個々人が愛するものである。きれいだと思う気持ちはつねに共有可能だが、美しいと思う気持ちはつねに個人的である。それゆえ真に美を見いだすことはすべて恥じらいを伴う。それは憧憬から生まれていて、憧憬は個としての人間の不完全さと欠乏から生じるからである。エロースはポロスとペニアの息子、つまり豊かさと言ひさの結合から生まれた子である。何かを美しいと思うためには、愛の客観性に至るのとは違つて個性が必要である（個体化だけではなく）。きれいだというのは、社会で通用する貨幣のようなものにすぎない。美しいものは愛され、きれいなものは恋をされる。愛は主観に縛られている主体の満たされぬ思いから発しているため、つねに今いるところから脱出しようとし、超越しようとするのである。女性にもそう、う、いた不満があると思う人は誤解しているし、人を見る目がない。Wはせいぜい恋するだけだが、Mは愛する。そして男よりも女のほうが真実の愛を体験できると大げさに哀れつづき言い立てる女性たちは愚かであり、その主張は正しく

ない。事實はその反対で、女性にそんなことはできないのである。恋することはすべて（とりわけ女が恋することは）、愛のような無限のたとえ話のイメージではなく、自分自身へと引き戻される円のイメージによく似ている。

男が女性にたいして個人として働きかけるとき、彼は自分の美によって影響を与えるわけではない。たとえ男のなかに美が現れていても、それを感じることができるのは男だけである。女の美だけではなく男の美についても、すべての概念は男によってつくられたことに気づかないだろうか。あるいは、これも「抑圧」の結果だともいうのか。女性によってある意味具体的なイメージを付与され、さまざまに派生してきた概念がただ一つだけある（ただし女性には概念を一つたりとも生み出していない以上、その概念自体をつくったのは女性ではないのだが）。それは、ヴィーンや南ドイツにおいては「生きのいい奴」（*der fische Kerl*）、ベルリンや北ドイツでは「たくましい男」（*der fische Mann*）と呼ばれる概念である。こうした言い回しにそれとなく表れているのは、男の発達した強力な性である。女性はずるところ、男を性と繁殖の世界から引き離すものすべてを、本や政治、学問や芸術を、つねに自分の敵だと感じているのである。

男のなかの性的なものだけが女性に影響を、それも性的な影響を与えるのであって、非性的なものや性を超越したものが女性に働きかけることはけつてない。そして美ではなく、あふれんばかりの性的欲望を、女性は男に求めている。女性に作用するのは男のなかのアポロ的なものではけつてないが、ディオニソス的なものでもない。それはつねに、最大限に膨らんだファウスのものだけである。男ではなく、いつも雄（*le melle*）だけである。それはとりわけ——現実の女について書かれた本が暴露しているように——最も限定された意味での男の性、すなわち男根である。

男の性器が女にとって——性的経験のある女性だけでなく、処女のと時からすでに——どういう意味を持つか、それがいかに女性の生全体を最高度に支配しているか、これまで直視しようとも語ろうともされてこなかったし、それについての正確なイメージもまだほとんど形成されていない。私が言っているのは、女性が男性器を美しいと思っていると

いうことでもなければ、きれいだと思つていふことですらない。女性は男性器を前にすると、メドゥーサの首を見た人間、蛇に睨まれた蛙のようになるのである。それは女性を催眠にかけ、呪縛し、魅了する。男性器が自分にとつて確かなもの、名づけようのないものだと女性を感じる——それは女性の運命であり、女性はそのから逃れることはできない。女性が男の裸を見るのをばかり、本当は見たいという欲求があるのを気取られまいとするのは、その瞬間自分が骨抜きにされてしまうかもしれないとわかつていふという、ただそれだけの理由からである。男根とは、完全に、そして永遠に女性から自由を奪うものである。

だから本来的に男の体の見映えを損ねているのは——そしてそれだけが男の裸を醜くしているのだが——まさにその性器だけなのである。それゆえ、男性器は彫刻家によつてもアカンサスの葉やイチジクの葉で繰り返し隠されてきた。男性器こそ女性を最も深く、そして最も激しく興奮させるものであり、それもおそらく最も不快な姿をさらしているとき、つまり勃起しているときにその興奮は頂点に達するのである。女性が愛に、美ではなくにか別のものを求めていることの究極の決定的な証拠はここにある。

ここまで述べてきた、女性についての新たな経験的知見によつて本研究は決定的に充実したものになったが、そのことはそれ以前の論述からも推測できただろう。論理学と倫理学がわかるのは男だけであるため、女性がそうした隣接分野は言わずもがな、それらを規範として成立した美学を理解することができないというのは、初めから予想できたことだった。美学と論理学の類似性は哲学のあらゆる体系と構造において見られるが、同時に芸術作品にたいする厳密な論理の要求や、数学の構築と音楽の創造における最高度の一致にも見られる。多くの人びとにとつて美学と倫理学を区別することがいかに困難かについてはすでに述べた。倫理的機能および論理的機能だけでなく美的機能もまた、カントによれば、主体によつて自由に遂行されるものである。女はしかし自由意志を持たない。かくして女には、美を空間に投

影する能力も与えようがないのである。

それゆえ女性は愛することができないともいえる。愛するためには個性を持つていなければならない。それも、それ自身純粹でも澄みわたっているわけでもないが、塵芥と汚濁の世界から自分自身を解放しようという意志を持つ個性である。というのも、持てる者と持たざる者のあいだにあるものがエロースだからだ。それは神ではない。デーモンだ。エロースだけが、死と不死のあいだにいる人間の立場を共有している。最も偉大な思想家、神のごとき、プラトンだけは、そのことを知っていた（プラトンをそう呼んだのはプロティノスだが、彼はプラトンを真に、心の底から理解した、ただ一人の人間である。だが今日の多くのプラトン註釈者や歴史家たちは彼の教えを理解していない。まるでハサミムシが流星について知ろうとしているかのような有様である）。愛は現実においては「超越論的な理念」ではない。現実の愛は、純粹に超越論的・先験的ではなく、感覚的・経験的でもある存在が抱く理念、すなわち人間の理念だからだ。

それについてまったく魂を持たない女は、自分にまわりつく不純物すべてを取り除いて、いつかどこかでその理念の全容を見いだしたいと切望することなどない。女性が男にたいして抱く理想で、男にとつての聖母を思わせるものはないし、純粹かつ純潔で道德的な男を女性は望んでいない。女性はそれとは別の男を求めているのである。

かくして、女性は男の徳を望むことができないことが証明された。女性が完全性という理念の刻印を帯びていて、何かの点において神の似姿であるといえるなら、男が女に神聖で神的なものを望むように、女性も男にたいして同じものを望むにちがいない。だがそうしたことは女性にはまったく無縁であるため、女性たちには自分自身の価値への意志が完全に欠けているということをもた証だてることにしかない。男がよくやるように、より簡単に自分自身の価値へと到達するために、その価値が自分の外部のどこかに体现されているとは女性は考えないのである。

解きたい謎が一つだけ残った。よりによってどうして女性が、対象を神のように崇めるこうした愛で愛されるのか。

そして少年愛において少年が女と同じように愛されるのは別として、どうして女以外の別の存在が愛されることはないのか。この点について、以下に示される仮説は大胆に過ぎるだろうか。

もしかすると、受肉のさいに男は、形而上学的かつ超時間的な行為によつて神的なものを、つまり魂を自分のためだけに取つておいたのかもしれない——どのような理由でそうしたのかはもちろんまだわからない。女性にたいするこの不当な仕打ちを、男はいま愛の苦しみのなかで償つてゐるのである。愛のなかで、あるいは愛によつて、女性から奪われた魂を男は彼女にもう一度返そうとする。彼女に魂を贈り与えようとする。男は女性から魂を奪つてしまったため、女性にたいして罪の意識を感じてゐるのである。まさに愛する女を前にしたとき、いやそれどころか、本当はそうした女を前にしたときだけ、男はなぜなのかわからない罪の意識に最も強く苛まれるのである。自分の罪を贖おうとするそうした返還の試みのむなしさは、なぜ幸福な愛は存在しないのかという疑問を解き明かしてくれるだろう。かくしてこの神話は、劇的な秘儀を不当に非難するものではないといえよう。だがこれは学問的考察、また学問としての哲学的考察の限度を超えている。

女性が望んでいないものは何かについては、以上で明らかになった。だが女性が心の奥底で望んでゐるものについて、そしてそれが男の望んでゐるものと真つ向から対立していることについては、これから示すこととする。

## 第十二章 女の本質とその宇宙における意味

### 「前半部省略」

価値はけつして譲り渡してはならないものだという感覚を女は生まれつき持ちあわせていないとこれまで縷々書き連ねてきたが、そこには撤回すべきところが何ひとつなかったし、限定の必要なところさえなかった。女の愛、女の敬虔、女の恥じらい、女の徳と一般に呼ばれるものすべてを持ちだしたところで、この考えを覆すことはできなかった。どんなに強く反論されても、男の長所のこうしたヒステリックな物真似をどれほど引き合いに出されても、この考えは変わらなかった。ここで問題となっているのは、女という性の影響されやすさである。女に子供を産ませることのできる精液の力——結婚したすべての女性に信じがたいほどの精神的変化が起ころのは、きつとまずもって精液が原因なのだが——だけでなく、男の意識、さらには社会的風潮も、きわめて幼い頃から女の空洞を満たし、浸透し、改造する。かくして男の性だけが持つあらゆる特性が、それを与えられていないはずの女の性のなかに見られることがあるが、それは女がその特性を奴隷のように真似しているからなのである。そう考えると、女にはより高い道徳が備わっているとしれば誤解される理由も、理解できるようになるだろう。

だが女性の持つこの驚くべき受容性はいまだ経験上の個々の事例にとどまっている。理論的研究のためには、それを女の持つほかの肯定的な特性や否定的な特性の関連のなかで描き出していくことが必要となる。何にでも形を変えると、いう女の特性は取り持ち好きな特性とどのような関係にあるのか。また女の性的な特性は欺瞞的な特性とどのような関係にあるのか。なぜ、こうした特性がすべて、ほかでもない女のなかで一体となっているのか。

加えてまず最初に説明されねばならないのは、すべてを自分のなかに受け入れることができる女性の能力がどこから来るのかである。他人から聞き知ったにすぎないことを自分の考えだと信じこみ、他人から受け取ったにすぎないものを自分のものだと思ひこみ、他人の手で作られたにすぎないものを自分自身だと見なすという、女のそうした欺瞞的な特性はどのようにして生まれるのか。

それに答えるためには、最後にもう一度脇道にそれる必要がある。覚えている人もいるだろうが、有機体すべてに共通する学習能力のうち心理的な能力である動物の再認は、人間の記憶とまったく異なったものでありながら、同時に類似してもいた。両者はともに、時間的に限定された一回限りの印象がいわば永遠に作用しつづけることを意味する。だがその一方で記憶は、直接的かつ受動的な再認とは異なり、過去を能動的に再生することを本質とする。続いてあらゆる有機体が特性として持っただけの個性性は、人間だけが持つ個性からはつきりと区別された。そして最後に性欲と愛を厳密に区別する必要性が認められ、性欲と愛のうち、これまでと同様人間でない生き物には前者だけが割り当てられた。それでも両者は、（みずからの永遠化を求めるといふ）卑しい面と崇高な面をあわせ持つ性質において類似している。

価値への意志もまた人間に特徴的なものとよく言われる。一方で、動物は快楽への衝動しか知らず、価値という概念とは無縁である。快楽と価値のあいだには類似が見られるが、両者は根本から異なっている。快楽は欲望されるものであり、価値は欲望されるべきものである。両者は不当きわまりないことにいまだに混同されているし、心理学と倫理学においても広範囲にわたって概念が混乱したままになっている。しかしこうした混乱は価値と快楽の概念に限った話ではない。人格と個人、再認と記憶、性欲と愛においても事情は同じである。こうした対立項はいつも明確に区別されずに使われているが、より注目すべきは、それがほとんどつねに同じ理論的見解に立った同じ人間たちの手によって、まるで人間と動物の区別を消し去ろうとするかのように意図的におこなわれていることだ。

ここまであまり触れてこなかったほかの区別についても、この点にかなしてはほとんどのものがおろそかにされている。意識の狭さは動物的であり、活発な注意力は純粹に人間적である。だれでもわかるように両者には共通するものがあるが、同時に異なっている。ふつう明確に区別されずに使われている衝動と意志についても同様である。衝動はあらゆる生き物に共通しているが、人間はそれに加えて意志を有している。意志は自由である。そして個々の心理学的体的



ここから見てとれるのは、生きとし生けるものすべてに共通するいかなる特性にも、人間の場合はそれとは別の、ある意味類似してはいるが、より高次の特性が上乗せされていることである。この二つの列は大昔には偏った視点から同一視されていたが、その一方で両者を繰り返し区別する必要も唱えられてきた。それは、両列の要素を互いに結びつけながらも、同時に下段を上段のあらゆる要素から区別するものがあることを示している。さしあたりここで人間は、高次の特性という上部構造が相関的な低次の現象の上に築かれているといった様相を呈している。これはインド密教の教え、つまり「人類の波」(Menschheitswelle)の理論を想起させると感じる人もいるだろう。それはいわば、人間においては、ただ動物的なだけのいかなる特性の上にも、それと類似しているものより高次の圏域に属している性質が上乗せされているというものである。ある振動が別の振動に加算されるように。つまり、人間は低次の特性を持たないというわけではないが、ただしその特性には別のものが付け加えられているのである。この新たに付け加えられたものとは何か。それは元からあるものといかなる点において区別され、いかなる点において類似しているのか。下段のいかなる要素も上段の同じ列の要素と類似しているが、その一方では双方の段のすべての要素が密接に結びついていることが、この表からはつきりとわかる。きわめて底深い断絶がありながらも、同時に生じるこの奇妙な合致はどこから来たのか。

下段に並べた項目はあらゆる動物の、あるいは植物の生が持つ基本的な特性である。そのような生はすべて個体化された生であり、未分化の塊ではない。それは欲求を満足させるための衝動として、とりわけ繁殖するための性衝動という形をとって現れる。それを踏まえると、個性、記憶、意志、愛は第二の生の特性と見なすことができる。その生は有機的な生とある種の類似を示しているが、天と地ほども (gaga coelo) 隔たっているのである。

それは宗教、とりわけキリスト教の提示する永遠の、高次の、新たな生という理念以外の何ものでもない。その深い正当性がここで我々に突きつけられているのである。有機的な生以外にも人間はそれとは別の生に、新約聖書でいうと

ころの永遠の生 (con auyovog) に参与している。前者の生が地上の食物によつて養われるように、後者の生は精神の糧を必要とする（聖餐の象徴）。前者が肉体的な誕生と死を知っているように、後者もまた精神的な誕生（人間の道德的再誕、「再生」）と精神的な死（狂気もしくは犯罪への決定的な墮落）を知っている。前者が自然の因果律によつて外的に規定されているように、後者は規範となる内的な命令法によつて自分を縛る。前者は限定された合目的なものだが、後者は果てしない無限の栄光に包まれた完璧なものである。

下段に挙げた特性はあらゆる低次の生に共通している。上段を特徴づけるのは永遠の生に通じる指標であり、人間が、そして人間だけが参与することができると高次の存在を告知するものである。両段に示された高次の生と低次の生が長きにわたつて混同され、しかし繰り返し新たに区別されてきたことは、人間精神のすべての歴史を貫く重要な主題である。これこそが世界史を動かしてきたモチーフなのだ。

この第二の生を、かつて存在していた別の特性から発展したものだと思ふ人もいるかもしれない。この問いに決着をつけることはここでは控えたい。だがより深く考えてみれば、感覚的かつ具体的な生から、より高次の、精神的な永遠の生が生みだされたと解釈する必要はないだろう。むしろ逆で、前章で述べたように、前者は感覚世界への後者の投影であり、必然性の国における似姿であり、降下であり、貶めであり、墮罪であると考えねばならないだろう。うるさい蠅を殺すのを思いとどまらせることができるのは、その蠅を照らす、永遠の生という高次の観念の最後の残照だけだからだ。

個性と意志を持たず、価値や愛に参与することのない完全な女はしかし、あの高次の、超越的かつ形而上学的な存在から締め出されていると、ここで我々は言うことができよう。男の叡智的かつ超経験的な存在は、物質も空間も時間も超越している。男のなかには死すべきものがあるが、同時に彼は不死のものも有している。そして彼は両者のうちのど

ちらかを選ぶことができる。地上の死とともに消えていく生か、地上の死によつてはじめて完全な純粹さのなかで自身を取り戻すことのできる生か。男の内奥の意志はすべて、この完全で無時間的な存在へと、絶対的な価値へと向かう。その意志は不死の欲求に等しい。そうして女性には個人としての存続を求める欲求がないということが、いよいよ完全に明らかになる。女性のなかには永遠の生がない。男は感覺世界における自分のみすばらしい似姿に抗して永遠の生を生きようとするし、そうするよう定められている。最高の価値という觀念との關係、絶対的なものという觀念との關係、そしていまだ所有できていないが（男はつねに限定された存在でもあるため）、精神が自然を支配することと到達可能な完全な自由という觀念との關係——そうした觀念との關係、神性との關係を、總じてどんな男も有している。たしかに地上の生によつて絶対的なものから分かれた切り離されはしたが、魂は墮罪、というこの汚辱から抜け出したいと再び切望するのである。

両親の愛が觀念への純粹な愛ではなく、多かれ少なかれ感覺的な実体を生み出すことを求めたのと同様、まさにその愛の結果として生まれた息子もまた、生きているかぎりには永遠の生だけでなく時間的な生も求めることになる。我々は死の想念を恐れ、それから身を守り、地上的な存在にしがみつく。この世界に生を享けることを今なお我々が望んでいることによつて、我々は生まれたときからそれを望んでいたことが証明されるのである。地上の死をもはやまったく恐れない人間であれば、今この瞬間にも死を選ぶだろう。その人間は今では永遠の生への純粹な意志しか持っていないのだから。人間はこうした生を自分の力でみずからの内に実現すべきであるし、人間にはそれが可能である。あらゆる生がみずからそうするように、永遠の生もみずからをつくり出すのである。

しかしどんな男も最高の価値という觀念との關係を持つてはいるが、そこに完全に参与することはできない。そのため幸福な男は存在しない。幸福なのは女性たちだけだ。自分が幸福だと思ふ男はいない。だれもが自由との關係を持つ

ているが、地上では依然として何らかの不自由を抱えているからだ。自分が幸福だと感じられるのは真正の女のような完全に受動的な存在か、あるいは神のような完全に能動的な存在である。自分が完全だという感覚を持つことができれば幸福だろうが、そうした感覚は男にはけつして手に入らない。だが女性たちのなかには自分は完全な存在だと思ひこんでいる者がいる。男はつねに自身の背後に問題を、自身の前方に課題を抱えている。あらゆる問題は過去に根ざし、課題は未来の国からやってくる。女にはそういう時間感覚はどこにもない。時間は女には何の意味も持たない。自分の生の目的を問う女性などいないのである。だがこの単線的な時間の流れは、この生がなにか一つの意味を獲得すべきであり、それが可能であることを逆に表しているのである。

男にとつての幸福——それは完全かつ純粹な能動性、完全な自由だけであろう。完全な不自由というわけではないにせよ、少しでも自由の制限された状態はけつして幸福ではない。自由の理念から遠ざかれば遠ざかるほど罪は大きくなるからである。人間の感覚が受動的だということを考えただけでも、男にとつて地上の生は苦しみであるし、そうでなければならぬ。感覚が刺激されるし、そこには物質があり、経験の形式だけが存在しているわけではないからだ。知覚の必要のない人間はいないし、天才でさえ知覚できなければどうしようもないのだ。たとえ彼がだれよりも力強くかつ素早く、彼の自我の内容すべてですぐに知覚を満たし、自我を全体に行きわたらせるとしても、やはり知覚は必要である。また、ある事物のアイデアを認識するために帰納法の手続きのすべてを用いる必要がないとしても、やはり知覚による帰納法は必要となる。受容性は、フィヒテのように強襲をかけたところで一掃することはできない。何かを感受することにおいては人間は受動的なのである。人間の自発性や自由は判断することにおいて初めて発揮されるし、あらゆる体験を個人の意志に即して再現できる宇宙的な記憶という形式をとつて初めて可能となる。最高度の自発性に接近し、全面的な自由が一見してすでに実現されているかのような境地へと導くのは、男にとっては愛であり精神的創造で

ある。それゆえ愛と創造によつて男は幸福とは何かを最もはつきりと予感し、（もちろんわずかな間だけだが）幸福の近くにいると感じて、そういう自分に打ち震えるのである。

それになりたい深刻な不幸に苛まれることのけつしてない女性にとつては、それゆえ幸福というのは本来的には空虚な言葉である。その実現を見ることはけつしてないが、幸福という概念をつくつたのは男、それも不幸な男なのである。女性たちは自分の不幸を他人に見せつけることを少しもはばからない。なぜならそれは真の不幸ではないからだ。真の不幸の背後には罪がある——少なくとも地上の生や原罪という罪が。

女の生が完全に価値のないものであり、そこには高次の存在が欠けていることを示す究極かつ絶対的な証拠がある。それは、女性が自殺するときの様子である。つまり女性たちの自殺はおそらく、つねに他のだれかのことを考えながらおこなわれる。あの人はどう思うだろう、自分のことを悲しんでくれるだろうか、嘆いたり怒ったりするだろうか——というふうに。女性は自殺する瞬間、自分自身の不幸を持っていると思つてはいけない。彼女は不幸だが、それは彼女の意識ではつねに、自分のものではない、不幸であり、その不幸に浸りきつているのである。女性は自殺する前に最もはげしく自分に同情する。自分がだれかに同情を寄せられた客体だと思つてただ泣くだけ、つまり主体であることを完全にやめてしまふという、自分自身への同情の図式のとおり。運命を持つこともできない女性に、不幸が自分のものだとどうして考えることができるか。女性の空虚と無価値の決定的な証拠となる恐るべきものはむしろ、死を前にしたとき、さへも女性は生の問題へ、自分自身の生の問題へと至らないということである。女性のなかには、個性が発揮されたより高次の生の実現を望む意志がないのだから。

それゆえ第二部冒頭で最も重要な問題として提出された問い、男の存在と女の存在はどういう意味を持つのかという問いに、今こそ答えることができる。女性は存在も本質も持たない。女性は存在しないし、女性とは無なのである。人

が、男であるか女であるかは、その人がだれかある人間として存在しているか、そうではないかによつて決まる。

女は存在論的實在にあずかつていない。それゆえ物自体と何の關係も持たない。そしてこの物自体こそ、より深く考へてみれば絶対的なもの、イデア、神なのに、女はそれとは無縁である。男は現實性を有し、天才であるがゆゑに、物自体の存在を信じている。その男が哲學者ならば、彼にとつて物自体とは絶対的なものであり、實在する価値の最高次の概念である。あるいは彼が藝術家ならば、それはまるで奇跡のような夢の國であり、絶対的な美の王国である。だが、いづれにせよ、どちらも言っていることは同じなのである。

女はイデアとは何の關係も持たない。女はイデアの存在を認めもしないし否定もしない。女は道德的でもなければ反道德的でもない。數學的に言えば、正負の符号を持たないのである。女は方向性を持たない。善くもなければ悪くもないし、天使でも惡魔でもない。女は無道德的であり、無論理的である。存在するものはいない、すべて道德的かつ論理的な存在である。だから、女性には存在していないのである。

女は嘘つきである。たしかに動物は、眞正の女性と同様に形而上學的實在を持たない。だが動物は言葉を話さないし、したがつて嘘をつくこともない。眞實を口にするには、その人は何らかの形で存在していなければならぬ。眞實とは存在について語られたものであり、存在にたいして關係を持つことができるのは、自身も何者かとして存在している人だけだからだ。男は眞實のすべてを求める。とはつまり、ただ存在することだけを求める。認識の衝動もまた、最後には不死の欲求と同じものになる。それによつて、敢然と自分の存在を主張するつもりもないのにある事態について何かを語る者、自分の内部で判断の形式を持つことなしに外部の判断を受け入れている者、女性と同じく眞に存在していない者、そういう者たちは必然的につねに嘘をつかざるをえない。それゆゑ、女性は客觀的に眞實を語つてゐるときでも、いつも嘘をついてゐるのである。

女は男女の仲の取り持ちをする。低次の生命体は個体であり、生物である。高次の生命体は個性であり、モナドであり、ヘレンバッハの用語でいう「メタ生物」（この用語はなおざりにされてはならない）である。いかなるモナドも自身を他のモナドから区別し、二つの事物がただ無関係に存在するかのようには、他のモナドから切り離されている。モナドには窓がない。その代わりに、モナドのなかには世界が丸ごと入っている。一つのモナドであり、潜在的な個性または現実的な個性（その場合彼は天才である）を持っている男は、自分以外のあらゆる場でも区別、分離、個別化、分割を求める。素朴な一元論はもっぱら女のものである。いかなるモナドもそれだけで完結した統一体であり、一つの全体である。だが同時に他者の自我もまたそれ自体で完結した全体性であり、そこに干渉することはできない。男は境界を有しているし、境界があることを受け入れ、また望んでいる。孤独を知らない女性性は、自分の隣人の孤独というものに気づくことも、それを尊重することも、それが不可侵のものだと承認することもできない。女性にとってはだから、孤独が存在しない以上、人びとと共にある状態も存在しない。あるのはただ、個々の区別なく溶けあった状態だけである。女性には自我がないから、汝と呼ぶべき相手もない。それゆえ女性性は、我と汝は互いに結びついた一対のものであり、区別できない一つのものだ<sup>(1)</sup>と考える。それゆえ女性には人と人々を引き合わせる<sup>(2)</sup>こと、仲を取り持つことが可能なのである。女性の愛の性質は、女性の同情の性質に等しい——それは他者と繋がった状態、一つに溶けあった状態である<sup>(3)</sup>。

女性には自我の境界がどこにもない。ときに破られることがあるにせよ、本来なら彼女を守るはずの境界がないのである。男の友情と女の友情の主な違いはまずこの点に求められる。男の友情はすべて、同じ理念の旗印のもとに協力する試みであり、彼らはみな個人として別々に、だが力を合わせながらその理念を追い求めるのである。女の「友情」とは一緒にいること、それもとくに強調すべきは、女たちが取り持ちという意図のもとで一緒にいることである。なんと親密で下心のない女性どうしの関係は、この意図に基づいたときにのみ可能になるのである。おしゃべりや物質的な

関心だけを理由に、女性たちが集うことはけつしてないのだから。<sup>(6)</sup>つまり二人の少女（女性はずがな）のうち片方がもう片方よりはるかに美しいとされるとき、醜い女性は、美しい女性が受けとる賛嘆の言葉にある種の性的満足を見いだす。だから女性どうしのいかなる友情においてもその第一の条件となるのは、二人のあいだに競争がないことだ。女性のみな、別の女性と知り合うとすぐに互いの容姿を比べてみるものである。二人の差がきわめて大きく競争が起き、そうにならない場合にかぎり、醜い女性は美しい女性を心から好きになることができる。互いにそれを意識することはまったくないので、醜い女性にとって美しい女性は、自分が性的満足を得る最も手近な方法だからである。彼女はまさに、いわば美しい女性になりかわつて性交しているように感じているのだ。<sup>(7)</sup>個人としてまったく独立していない女性の生、そして個人の境界を越えてしまうという女性の性の感覚や、女性という存在の基本的特徴である取り持ちが、ここにはつきりと現れている。女性<sup>は</sup>他の男女の仲を取り持つのと同様に、その人たちになりかわつて自分自身と男の仲を取り持つているのである。ひどく醜い女でさえもこれだけはと望むのは、女性という性のうちだれか一人が賛嘆され欲望されるということである。それだけですでに彼女は満足なのだ。

このように自他の区別なく完全に溶けあつた女の生のあり方は、女性が本当の意味での嫉妬をけつして、覚えないこととも関連している。嫉妬や復讐心は卑しい感情ではあるが、どちらも何か大いなるものを内包している。そこに含まれた大いなるものに関与することは——善にせよ悪にせよ、あらゆる大いなるものと同様——女性には不可能である。本当はそんな権利などないのだが、嫉妬のなかには死にもの狂いの権利の要求がある。そして権利の概念は女性の理解を超えている。だが女性が一人の男にたいして心の底から嫉妬することができない最大の理由は別にある。男、それも自分が激しく恋い慕う男が、彼女の隣の部屋で別の女性と抱擁し関係を持っていたとしても、それを想像しただけで彼女はひとりで性的に興奮してしまい、嫉妬の生まれる余地などないだろう。男の場合は、隣の部屋でそういうことになつ

ていると知ったら、反吐が出るほど不快だとしか感じないだろう。いま自分が近くにゐるのが気持ち悪いと思うかもしれない。女は内心ではほとんど熱に浮かされたように、事の一部始終を歓迎している。自分はやはりこの性的合一を心の底で本当は望んで、いたのだと認めようとしなければなら、女はヒステリーになる。

さらに男には、他人の性交についての想像で頭がいっぱいになることなどけつしてない。男はそうした体験の外に、そしてそうした体験を超えたところに立っている。そんなことは彼にとつて本来どうでもいい。だが女性はみずからそう、い、う、し、よ、うとほとんど思うことなく、気づいたらその一部始終を追いかけている。女性は熱に浮かされたように興奮しながら、自分のすぐ隣で起こっていることを想像し、その虜になるのである。

時には男も、隣人の性生活にまで関心が及ぶことがあるかもしれない。隣人は彼らにとつてまったくの謎だからだ。だが隣人の性をいわば視き、見みする好、奇、心は女だけに特有のものである。だがそれはだれにたいしてもあまねく發揮され、男にも女性にも同じように向かうのである。女性がだれかれかまわず興味を抱くのは、その人の情事をおいてほかにない。そして情事について詳しく知るまでは、その人は彼女にとつて、謎が多く興味の惹かれる対象でありつづけるのである。

こうしたことすべてからいまだ一度はつきりとわかるのは、女という性の性質はすなわち取り持ちだということである。純粹に内、在、的、な考察によつて以上のことが突き止められ、じじつ目的は達成されたと言えよう。だが私はさらに先へと進んだ。そしてここまでですでに、有としての、つまり取り持ちとしての女が、モナドとしての高次の生をまったく持たない無としての女としかにして結びつくのかということについては、ざつと説明できたと思う。女はただ一つの理念を体现している（それゆゑ自分ではその理念を意識することはできない）。それは、魂の理念と極端に対立するものである。夫婦の交わりを望む母であろうと乱交を好む売春婦であろうと、夫婦二人の家族を望もうとヴェーヌスベルクでの集団での絡み合いを求めようと、女はいつも他者、と繋がるという理念にしたがつて行動しているのである。それ

は個人どうしを混ぜ、合わせる、ことによって、その境界をことごとく破棄する理念である。

かくしてここからまた別のことも明らかになる。性交の伝道者になれるのは、個性も自他の境界も持たない存在だけである。その論証のさいに長い前置きを付けたのはいわれのないことではない。この主題の取り扱いにおいて、いやこれまでの性格学の研究においても、こんなに丁寧な前置きがなされたことなどなかっただろう。このテーマは大変有意義なものである。ここでは生の二つの側面、つまりあらゆる高次の生とあらゆる低次の生の関係が明らかにされるはずなのだから。心理学と哲学のいかなる領域においても、それがまともな研究かどうか判断するとき、他の何よりもすぐれた試金石はここにある。ただそれゆえに、男／女の問題は性格学のあらゆる領域において最も興味深い問題でありつづけているし、私がそれをこの包括的で壮大な研究の対象として選んだのもただそういう理由からである。

話がここまで来たところで、もしかするとこれまでは薄々疑問に思っていただけのことを、はっきりと尋ねる人が出てくるかもしれない。つまり、以上の見解によればそもそも女性はまだ人間だと言えるのか。著者の理論によれば、女性とは本来的には動物や植物の一種として数えられなければならないのではないか。著者の言うところでは、女性は動物や植物に劣らず、感覚的な存在以上の高次の存在たりえていないからである。個としての存続への欲求もなければその可能性すらないほかの生物と同様、女性は永遠の生にほとんど関与していない。両者はともに形而上学的実在にほとんどあずかっていない。それらはみな存在しない、女も動物も植物も——それらはみなただの幻影であり、物自体にかわるものをどこにも持ちあわせていない。人間の存在の内奥を捉えた見解によれば、人間は宇宙の鏡であり、彼自身が宇宙の縮図なのである。だが女性は天才からはほど遠く、宇宙と深く結びついた関係のなかで生きることではない。

イブセンの『小さなエイヨルフ』のなかのある美しい場面で、女が男にこう話しかける。

リタ「わたしたち、結局ただの人間じゃないの」

アルマース「空や海ともぼくらはすこし通じ合うものがあるんだよ、リタ」

リタ「あ、あなたは、そうかもね。わたしは違うけど」

ここには詩人の洞察がきわめて明確に表現されている。つまり女性は無限や神性の観念とまったく関係を持たないものである。女性には魂がないのだから。インド人によれば、ブラフマンへと到達するにはアートマンを通じていく道しかない。女は宇宙の縮図ではないし、神の似姿として生まれたのでもない。女はそれでも人間なのか。あるいは、女は動物なのか。植物なのか。

解剖学者にしてみればこうした問題はじつにばかげたものだろうし、そもそもそのような問題設定を可能にする土台が初めから誤っていると考えらるだろう。解剖学者にとって女はホモ・サピエンスであって、他のすべての種とはつきりと区別される。そしてあらゆる種の雌がその雄と同じ種に分類されるのと変わらず、女も男と同じ人間として分類される。だが哲学者は「解剖学者ふぜいが首を突っこむな」などと言ってはいけない。たとえ解剖学者の側から自分の関心にたいするどんなわずかな理解も期待できないとしても、哲学者がここで語っているのは人間学的な事柄である。哲学者が真実を見つけたからといって、その正当性の分だけ形態学的事実が切りつめられたりしてはならないのである。

本当のところはこうだ！ たしかに女性は無意識のうちに生きているため、男よりもより自然に近いことは間違いない。女性にとって草花は姉妹のようなものである。女性は男と比べて動物との距離が近いが、それは女性のほうが獣姦の傾向があることを示しているのであろう（パーシバエー神話やレーダー神話。愛玩犬との関係もおそらく、ふつう想像されているよりもはるかに官能的なものだろう）。しかし、そんな女性も人間である。叡智的な自我のいかなる痕跡

もないと見なされるWでさえも、それでもMの補足相手なのである。人間の男が性の面でも愛の面でも人間の女と特別な補足関係にあるという事実は、たとえ結婚の価値を信じている人が喧伝するような道徳的な現象ではないとしても、おそらく女性の問題にとつて途方もなく大きな意味を持つ。動物が未来永劫ただの個体でしかないのにたいして、女性は個人である（個性ではないにしても）。外的な判断の形式も（内的な形式は違うが）、使う言葉も（話し方は違うが）、いくらかの記憶力も（連続的で統一された自己意識は持たないが）女性には与えられている。女性が持っているのは、男が有するものすべての代用品である。この女性特有の代用品こそ、今なお両者が混同されつづけている原因であり、女の価値を評価する者たちはみずから進んでそれに足をすくわれるのである。

ここで新たに提起されているのは、性の対立関係の最終的な本質についての問題以外の何ものでもない。男性原理と女性原理が動物界や植物界で果たす役割については、ここでは考察しない。対象とするのは人間だけである。この研究では初めからずっと、そうした男性原理と女性原理を、形而上学的なイデアではなく理論的な概念と見なさなければならぬと言おうとしてきた。たんなる生理学的かつ性的な差異以上に——もちろん人間の場合に限った話だが——男と女のあいだにどれほど大きな違いがあるかについては、これまでの考察全体をとおして示してきた。性の二項対立という事実を、さまざまな機能を二つの異なる存在に分配する装置、つまり生理学的な働きを割り振る装置としか見なさない見解——それが広く流布したのは動物学者のミルヌ・エドワールによるところが大きいと私は思うのだが——そういう見解は、これまでの論述にしたがえば到底受け入れられるものではない。その戯言にも等しい浅薄さや知的関心の乏しさについてこれ以上言葉を費やすつもりはない。たしかにダーウィニズムはこの見解を普及するのに大いに手を貸したし、それどころか初期の段階では性的に未分化だった生物のなかから性的に分化した生物が出現してくるという考え方はかなり一般的に受け入れられた。より原始的で、男と女の機能の両方を背負った、性を持たないあるいは両性をあ

わせ持つ種に、性を二つに分けることで負担を軽減した生き物が勝利したのだ、と。だがそのような「分業のメリット」や「生存競争の緩和」による「性の発生」というのがまったくありえない妄想であるということは、虫けらのような現代のダーウィン主義者どもよりもはるかに以前に、グスタフ・テオドーア・フエヒナーによって、反論のしようもないほど完璧に証明されている。

男と女が存在する意味をそれぞれ単独で究明することはできない。互いの存在をとおしてのみその意味を定め、理解することができる。つまり互いの関係のなかに、両者の本質を解き明かすための鍵を見つけないといけないのである。その鍵については、エロースの本性を突き止めようとしたときにすでに簡単に触れた。男と女の関係は主体と客体の関係にはかからない。女は完全な客体になることを求めているのである。女は男のために存在する、あるいは子供のために存在する。いくらひた隠しにしたところで、だれかのためのもののように扱われる以外のことを女は望んでいないのである。女性の心のなかで起こっていることを知りたいと思い、彼女の感情や願望、体験や内面的な特性に関心を持つ人は、女性が本当に望んでいることについて何もわかっていない。女性は主体として扱われることを望んでいない。女性はずねに何につけても——まさにそれこそ、女性であることの証左なのだが——ひたすら受動的であろうとするし、だれかの意志が自分に向けられているのを感じたいと思う。女性はまわりから疎まれないとは思わないが、かといって大切にされたいのでもない。彼女が主体として尊重されたいと思っていないのである。女性が欲するのはむしろ肉体的に求められること、だれかの所有物として所有されることだけである。ただの感覚が、概念化される、つまり対象化されることによって初めて實在性を獲得するのと同様に、女は主体である男や子供の客体にされて初めて存在するようになり、存在しているという感覚を得る。こうして女は存在を与えられるのである。

認識論的に言えば主体と客体の対立だが、これを存在論的に言えば形相と質料の対立になる。それは前者の対立を超

越論的な領域から超越的な領域へ、経験批判の領域から形而上学の領域へと移行させたものである。質料、それは絶対に個別化できないものであり、いかなる形相も取ることができるが、それ自体としては一定の持続的な特性を持たない。ただの感覚（経験の素材）がそれ自体として存在を与えられていないのと同様に、質料も本質をほとんど持たない。つまり主体と客体の対立が（主体に、対置された対象になつて初めて、感覚は實在性を獲得するため）存在をめぐるこのような対立である一方で、形相と質料の対立は本質があるかないかの違いである（質料は形相を与えられなければ絶対に質を持たない）。それゆえプラトンは、質料的なもの、造形可能な塊、それ自体として形相を持たない無限定なもの（*ἀσχετόν*）、刻印を受ける（*ἐκτύπητον*）可塑的な生地、形相がその中に入っていくもの、形相の場（*χώρα*）（*ὁ χώρος*）生成が生じる場所、あの永遠の第二のもの、他のもの（*ἄλλο*）——それらを非存在（*μη ὄν*）と呼ぶことができたのである。プラトンのいう存在しないものとは空間であるとしばまことしやかに言われるが、そういう者はこの最も深遠な思想家をじつに浅薄なレヴェルに引き下げている。たしかにすぐれた哲学者は空間に形而上学的存在を認めないだろうが、空間を存在しないものそれ自体だと見なすこともできないだろう。何もない空間とは「空気」であり「無」であると語るのは、まさに無知で恥知らずな評論家のやることである。深く考えて初めてそれは實在性を獲得し、問題として扱われる。プラトンのいう存在しないものとはまさに、俗物にとつては考へうる最も實在的なもの、存在価値を合計したものである。それは質料にほかならない。

もし私が、いかなる形相も受け入れることができるのはあらゆる生成の母にして乳母だと喩えたプラトンにならない、そして生殖行為において女性原理に素材としての役割を、男性原理に形相を与える役割を割り振る自然哲学を提唱したアリストテレスにしたがうなら、これまでの議論から断絶することになるだろうか——もし彼らの見解をさらに敷衍して、人間にとつて女の意義は総じて、女が質料を代表していることにあるのだというなら、それは恣意的な主張だろう

か。宇宙の縮図としての男は、高次の生と低次の生、形而上学的な存在と非存在の両方から構成されている。だが女は存在しない。女はただ質料ではない。

この認識を得て初めて、本研究の最後の仕上げに取りかかることができる。この認識からいまだ説明されていないことすべてが明らかになるだろうし、そのすべてが統一的連関の輪を完成させるのである。女の性的志向は接触へと向かう。それはただの接触衝動であって、腫脹消失衝動ではない。それと対応して、女の持つ最も鋭い感覚、男よりはるかに発達している唯一の感覚は触覚である。視覚と聴覚はどちらも果てしないものと人をいざない、無限なるものを予感させる。だが、触覚が作用するためには肉体的に限りなく近づいていなければならない。そして何かに触れているうちに、人はそれと混じりあってしまう。触覚はきわめて不潔な感覚であり、まるで肉体的な繋がりを求める存在のためにつくられたかのようなのだ。その感覚が伝えるものは抵抗感、つまり触れられるものの手触りである。そしてカントが言っていたように、まさに質料については、空間を満たすものであり、なかに入ろうとするとわずかに抵抗してくるものという説明しかできないのである。「障害」を経験することによって、心理学的な物の概念（認識論的な概念ではなく）のほかに、ほとんどの人にとって、触覚によって得られた情報がつねに有している過剰なほどの実在的性格も——すなわち経験世界の有するより堅固で「第一義的な」性質も——生まれた。だが、質料が本来的な実在という性格を完全に失っていないと男が感じてしまうのは、彼にたえずまとわりついている、女という性の最後の残滓のせいに他ならない。もし完全な男というものが存在したなら、彼にとって質料は（論理的にだけでなく）心理学的にも、どんな形でももはや存在しないだろう。

男は形相であり、女は質料である。それが正しいとすれば、心的な体験どうしの関連のなかにもこの命題がそれぞれ現れていることを確認しなければならない。男の内面生活の内容は、分節化されていない混沌とした女の空想からか

てよりはつきりと分かたれていたが、それはまさにこの、形相と質料の対立を示している。質料は形相を得ようとする。それゆえ女は男に思考のもつれを解きほぐしてもらいたい、自分のヘーデの状態をわかりやすく説明してほしいと望んでいるのである。

女性はどうな形相も受け入れる質料である。男子生徒よりも女子生徒のほうがとりわけ授業の内容をよく覚えていてという研究があったが、それはどんなものが内部に浸透してきても、無意味で無価値な女性性は平気でいられるからだとして説明できない。反対に、男は自分が本当に興味のあるものしか覚えていないし、それ以外のことはすべて忘れてしまふ。だがとりわけ女の柔軟さと呼ばれていたもの、他人の判断にひどく影響されやすいこと、暗示にかかりやすいこと、男によつて完全に作り変えられること——これらは女がただの質料であること、もともといかなる形相も持ちあわせていないことに起因する。女は無であり、そしてそれゆえ、ただそれゆえに、あらゆるものになることができる。それにたいし男はつねに、彼がそうであるものにしかなることができない。女性からは望むものを何でもつくり出すことができる。男にたいしては、せいぜい彼が望むものになれるよう力を貸すことくらいしかできない。それゆえ、言葉の本当の意味において、教育する意味があるのは本来的には女性だけである。男の教育には意味がない。どんな教育を施しても、男の本質的な部分を変えることはできない。だが女は、性を価値あるものと見なすという、最も深く根を下ろした本性さえも外からの影響によつて完全に抑圧できる。女はあらゆるものに見えるかもしれないし、そのすべてを否認するかもしれない。だが女は、けつして真に何かとして存在することはない。

ここまでの推論には同意してくれたとしても、男とは本来何であるのかという問いにまだ答えていないと文句を言う人ももちろんいるだろう。女の取り持ちや非存在のように、男について何か普遍的な特性を挙げることが可能だろうか。女の場合はあつても、そもそも男に共通する概念はあるのか。そして、女のようにそれを定義できるだろうか。

そうした問いにたいしては、こう答えることができよう。男という性の本質はまさに、個性、すなわち存在の根本を

なすモナドという事実、にあり、それは全員に共通している。だがどのモナドも別のモナドとは無限の差異があるため、いくつかのモナドに共通するより包括的な概念のなかに組み入れられることはない。男は宇宙の縮図であり、男のなかにはおしなべてあらゆる可能性が含まれている。これを、万物にたいする感じやすさという女性の特徴と混同しないよう注意してほしい。女性は、何かであるわけではないから、あらゆるものになれる。その一方で男はあらゆるものであるから、（いくらかは才能に左右されるにせよ）そこからあらゆるものになることもできるのである。男は自分の内部に女も質料も有しているし、存在のその部分を成長させることができる。つまり男は墮落し、退化することもできる。だがそれを認識し、それと闘うこともできる——それゆえ男は、そして男だけが、女を超えて真実へと到達することができる。しかし女は、男に変えてもらう以外に発展の可能性がないのである。

男と女が存在する意味はつねに、両者の性的な関係および愛の関係を考察することによって初めて完全に明らかになる。女性の心の最も深くに根ざした欲望は、男によって形相を得て、そうすることで初めて創造されることである。女性には男に、自分がこれまで考えていたこととはまったく異なる考えを吹き込んでもらいたいと思う。自分がそれまで正しいと思っていたことが男に覆されることを望む。自分のすべてが否定されることを望み、そうして初めて男によって新たに生み出されることを望む。男の意志がまず女性を創造する。男は女性を支配し、根本から女性を作り変える（催眠）。ここでようやく、男と女における、心的なものと肉体的なものとの関係についても明らかになる。現象世界への精神の投影理論が唱えられる以前から、男については相互作用、それも超越的な精神による肉体の一方的な創造という意味での相互作用が認められていたのにたいし、女に認められていたのは、たんなる経験的・心的なものとの経験的・肉体的なものとの平行関係だった。いまや女にも相互作用が見られることが明らかになった。だがショーペンハウアーの正鵠を射た言葉のとおり、男にとつて人間とは自分自身の作品であり、自身の意志によって肉体を創造し作り変えるのにな

いし、女は他人の意志によって肉体的に影響され形を変えられる（暗示、錯視）。男はだから自分自身だけでなく女をも形づくるし、それは自身を作るよりはるかに簡単なのである。女は男から創られたのだとする、創世記や他の宇宙生成論の神話は、男性的なものは女性的なものから生まれたと信じてやまない生物学的進化論よりもずっと深遠な真実を告げ知らせていたのである。

自身は魂も意志も持たない女がなぜ、男がどの程度魂や意志を有しているかわかるのかという問題が第九章で提示されたが、これにはまだ答えが出ていなかった。だが今なら、このきわめて難しい問題にも答えられるかもしれない。最低限明らかにしておかなければならないのは、女性が気づき感受しているものは男に固有な本性ではなく、一般的な事実であり、さらにはその人の男性度の程度でしかないことである。女性は本来男の個性を理解できるという主張はまったくの誤りであり、見せかけにすぎない。あるいは、男性的性質を注入されて後天的に得た能力からの誤った推測である。女に夢中になった男は、その女は自分を深く理解してくれていると無意識に自分を偽るため、とかく物笑いの種になりがちだが、その理解とは相手の娘を介した自分自身の理解であらう。そんな欺瞞に満足できない人は、女性は魂の実体（*Wes*）ではなく様態（*Dab*）、人格の特異性ではなく形式的かつ一般的な事実しか知覚できないのだと認めざるをえない。その人特有の形相を知覚し統覚するためには、質料それ自体が形相を持たないままではならぬからだ。だが女性の男にたいする関係は、質料の形相にたいする関係に他ならない。そして女性が男を理解するのも、できるだけのつきりとした形相を与えられるのを待ち望んでいるから、つまり存在しないものが存在を求める本能に他ならない。だからこの「理解」は理論的なものではない。それは男への関心ではなく、分け前にあずかりたいという欲望、図々しく自己中心的欲望なのである。女性は男にたいする関係を持たないし、男を理解することもない。女性は男性度を理解できるだけである。男よりも女性のほうが性的な面で要求が多いと考えてよいなら、この要求の多さは、こ

の上なくしつかりと形相を与えられたいという激しい欲望に他ならない。それは最大限の存在を待ち望むことなのである。

つまるところ、それは取り持ちについても同様である。女性の性は個人を超えているが、それは女性が境界と形相を持つ、個人としての高次の本質を体现していないためである。女の人生のうち、みずからの根源的存在と根源的快樂が開示される最高の瞬間は、男の精液が体内に流れこむときである。そのとき女は男を激しくかき抱き、ひとと抱き寄せる。それは受け身の快樂の極致であり、催眠をかけられたときの幸福な感情よりもはるかに強い。今まさに形相を手に入れようとしている質料は、その形相を手放さず、永遠にそれと結びついていようとする。貧しい者はこうして繰り返し豊かさにあずかろうとする。分節化されていない者は、まったく形相を持たない、それゆえ個人のあずからぬ行為に走る——それは形相に触れようとし、触れたあとはそれをずっと擱んだまま、そうやって存在を獲得しようとするのである。取り持ちの根底にあるのはそうした試みである。女はモナドではなく境界を持たないが、それは取り持ちをただ可能にするだけである。実際に、取り持ちが起くるのは女が無の觀念、そして質料の觀念を体现していて、その觀念が、たえずあらゆる手を尽くして形相を自分自身に取りこもうとするからである。取り持ちは、何ものでもないものが何ものかになるうとする永遠の衝迫である。

かくして男と女の二元性は、しだいにあらゆる二項対立へ、つまり高次の生と低次の生、主体と客体、形相と質料、有と無という二項対立へと發展した。あらゆる形而上学的存在、あらゆる超越論的存在は、論理的かつ道德的存在である。女は無論理的で無道德的である。かといって、論理的なものや道德的なものに背いているわけでもない——つまり、反論理的でも反道德的でもない。女は「ではない」(das Nicht)のではなく、「無」(das Nichts)のである。女は肯定でもなければ否定でもない。男は絶対的な有になる可能性と絶対的な無になる可能性をみずからのうちに兼ね備えている。

て、それゆえ男の行動はすべてどこかへ向かう方向性を有している。女は罪を犯さないが、それは女自身が罪そのものだからである。男にとつては、罪は可能性の一つである。

純粹な男は神の、つまり絶対的な有の似姿であり、女（男のなかの女の要素も）は無の象徴である。それが宇宙における女の意味であり、そのようにも男と女は補完しあい、関連しあっている。男の対立項として、女は宇宙のなかで意味や機能を持つ。そして人間の男が動物の雄を超えていくように、女も動物学における雌を超えていく。（動物界で見られるように）有限の存在と有限の非存在が人間のなかで争うことはない。ここで対立しているのは、無限の存在と無限の非存在である。それゆえ男と女が両方存在して初めて人間が構成されるのである。

女の意味とはつまり無意味であることにある。女は無を、神の対極を、人間の別の可能性を体现している。それゆえ当然、女同様に輕蔑されるのは女のような男くらいだ。そのような男はこの上なく愚鈍で粗暴な犯罪者よりも輕んじられる。かくして、男の心の最も奥深くに根ざしたあの恐れについても説明がつく。それは女にたいする恐れであり、無意味にたいする恐れである。男を誘惑する無の深淵にたいする恐れである。

本当は女とは何なのか、老婆を見れば完全にわかる。純粹な経験的事実に即しても、女性の美は男の愛によつてのみ作られるのである。男が愛しているときに女性はいより美しくなる。女性を受動的に、男の愛のなかの意志に應えているからだ。どれほど神秘的に思われようと、これはただの日常的な觀察である。女が美しかったことなどこれまで一度もないと老婆は教えてくれる。そういう女が存在していれば、魔女など存在していないだろう。だが女は無であり、ずっと化粧でうわべを飾ってきた空っぽの器なのである。

女性のあらゆる質はその非存在に、その本質の欠如に由来する。女性が変わることのない真の生を持たず、ただ地上的な生しか有していないため、取り持ち女として地上の生における生殖を後押しするし、また、官能的に働きかけてく

る男によつて根底から作り変えられるほどに、総じて影響を受けやすいのである。かくして本章で明らかにしてきた、女の三つの基本的な特性が一つになり、つまるところ女の非存在に集約されるのである。

非存在という否定的概念から直接演繹することで、一貫性がない、嘘をつくという、否定的な二つの定義が導き出される。取り持ちは女の定義のなかで唯一否定では表せないものであり、これだけは単純な分析によつてすぐ導き出すことができない。

それも当然である。女の存在、それ自体が取り持ちと同じであり、あらゆる性一般の肯定に等しいからだ。取り持ちとは性の遍在に他ならない。女が存在するというのはつまり、性の遍在を求める過激な傾向がこの世界に存在していることに他ならない。取り持ちの原因をさらに遡つて考えることは、女の存在を説明することに等しい。

加えて、二種類の生のあり方についての表から考えれば、高次の生から地上の生へと下降する方向、存在ではなく、非存在の獲得、無への意志、「ではない」という否定、悪そのものが存在することがわかる。無を肯定することは反道德的である。それは形相を、形相を持たないもの、つまり質料に変えたいという欲求であり、破壊の欲求である。

だが、「ではない」という否定は「無い」とことと密接に結びついている。それゆえあらゆる犯罪とあらゆる女性的なものとは非常に深く繋がっている。反道德的なものは無道德的なものに通じるところがある。本研究においては、同じ非道德的なものという概念のなかでも、無道德的なものと反道德的なものはさしあたり明確に別のものであるとして論じてきたが、両者が普段区別なしに使われているのは理にかなったことでもある。無は単独ではまさに——何ものでもなく、存在しないし、存在も本質も持たない。それはつねに否定の手段であり、否定によつて有に対置されるものでしかない。男が自身の性を肯定して初めて、つまり男が絶対的なものを否定して、永遠の生に背を向け、低次の生に歩み寄つて初めて、女は存在を手に入れる。有が無に接近することによつてのみ、無は有を獲得できるのである。

男根肯定は、反道徳的である。それゆえ男根は最も醜いものと見なされるし、サタンと関係があるとつねに考えられてきた。ダンテの地獄の中心（地球の内部の中核）をなすのはルシフェルの男根なのである。

かくして、男の性器が女にたいして絶対的な力を及ぼすことが明らかになる。男が性的になることによつてのみ、女は存在と意味を獲得する。女の存在は男根と結びついている。それゆえ男根は女の最高の主人かつ専制的な支配者である。性的存在と化した男は女の運命である。ドン・ファンは女を心底震え上がらせる唯一無二の男である。

うすうす気づいていたことだが、われわれ男は女に呪いをかけた。その呪いとは男の悪しき意志である。無とは男が何かを否定するさいに用いるただの道具にすぎないのだから。教父たちが女を悪魔の手先と呼んだのも、それをより激烈な調子で語つたにすぎない。質料それ自体は無であり、まずは形相が質料に存在を与えたいと願望しなければならぬのである。形相の墮罪とはまさに、質料に働きかけるよう駆り立てられることによつて、形相が被る汚辱である。性的になったとき、男は女を創りだす。

だから女が存在するということは、男によつて性が肯定されたことに他ならない。女はただ、性がこうして肯定された結果存在するのである。女は性そのもののなのだ。

女の存在は男によつて決まる。男が女の対義語としての男になる、つまり性的になることによつて、その男は女を創りだし、存在へと招き入れる。そのため女にとって何より重要なのは、男を性的なままにとどめおくことにちがいない。男が性的になればなるほど、女の存在は確たるものになる。そのため男は男根そのものと化さなければならぬし、女はそれを求めている。そのため女性を取り持ちをするのである。女性には、人間を目的、つまり性交というこの目的のための手段として用いることしかできない。男に罪を犯させる以外の目的を女性が追い求めることなどないのだから。もしも男が自身の性を克服したなら、その瞬間女は死に絶えるであらう。

男は女を創りだした。そして性的な存在でありつづけるかぎり、たえず男は新たに女を創りだす。意識を与えたのと同様に、男は女性に存在を与える。性交を断念しないから、男は女を生み出してしまふ。女とは男の罪なのである。

この罪を償うべく男がおこなうのが愛である。前章の末尾では怪しげな神話として紹介するにとどめた問題が、そこから解明される。女を創造すること、つまり性交の肯定によつて犯した罪、そして今もたえまなく犯しているその罪を、男は女を愛すること、償つてゐるのである。惜しみなく与えるという、すべての愛が持つ性質がそれ以外のどこから生まれてこようか。愛において男は、他のどの生き物でもなくただ女に魂を与えようと心を砕くが、こうしたこともそれ以外のどこから生まれてこようか。女は完全に、男が自身の衝動の向かう目標として生み出した対象にすぎない。女は男の性の客体として生まれたものであり、男の性を体現したものであり、男の罪が受肉したものである。男は愛によつて、この罪を乗り越えるのではなく覆い隠そうとする。愛は女を消し去るのではなく崇める。有は無を抱きしめる。そうすれば世界を否定的なものから解放し、あらゆる矛盾を解消できると考えている。有が無に距離を置けば、無はただ消滅するしかないであろうに。男の愛は、女そのものを否定する代わりに、女を女のまま救おうとする、はなはだ大胆で途方もない試みである。愛に罪の意識が芽生えるのはただそういう理由からである。男は愛によつて罪を償うのではなく、愛によつて罪そのものをなかつたことにしようとしてゐるのである。

女とはただ罪であり、男の罪によつてのみ存在する。女という性を取り持ちを意味するとして、それはただあらゆる罪は放つておけば増殖しようとするからである。女性はいくらも変わることはない。そのありのままの存在、その存在全体において、永遠に意識されないまま、女性は男の持つある傾向を獲得する。だがそれは男の第二の、根絶しがた、低次の傾向にすぎない。女性はヴァルクユール (Walküre) のように、他人の意志で「盲目的に選択している」(blind wählende Kin) のである。質料は形相に劣らず底知れない謎であり、女は男と同程度に無限であり、無は存在と同様に

永遠であるように思われる。だがこの永遠は、罪が永遠であることを意味するにすぎない。

#### 第十四章 女と人間

ここでもようやく、再び女の解放という問題を——夾雑物を取り払い、理論武装して——取り上げる準備が整った。夾雑物を取り払いというのは、いまや対象に群がる蠅ども、つまり対象を取り巻き視界を曇らせる曖昧さが消え去ったからであり、また理論武装してというのは、これまでに女についての堅固な理論的概念が得られ、確かな倫理的考察がなされてきたからである。子供のお遊び程度の日常的な議論の場を離れ、男女の才能の違いの問題さえもはるかに超えて、本研究は宇宙における女の役割を、そして女の使命が人間にとって持つ意味を示唆するに至った。それゆえここでも、あまりに特殊な性格についての問いには論及しないほうがよいだろう。政治的活動に影響を与えると期待できるほど、本研究の結論は楽天的なものではない。それゆえ社会衛生的な提案は断念して、イマースエル・カントの哲学全体を貫く人間の理念の視点からこの問題に取り組むこととする。

この理念は、女という性によって大きな危険に晒されている。女性は本当は無性的だ、たとえ性的になったとしてもそれは男にたいする譲歩にすぎないのだ——そう見せかける巧妙な手管が女性にはある。それもそのはずである。この見せかけがなければ、何人かの、いや大勢の男が一人の女性をめぐる争うなどということがどうして起こりえようか。だが女性は今、自分の言うことを信じてくれる男たちのおかげもあって、異性にとんでもないことを吹き込むのには成功しているのである。男の最も重要で最も本来的な欲望は性欲であり、男は女によって初めて自分の最も真実かつ

最も根本的な願望を叶えることができるのであり、男の純潔は不自然で不可能なのだ、と。真剣に勉強に励み、それに満足している若者たちに女の魔の手が伸びることがどれほど多いか。恋人や義理の母など、彼らを少なからず氣に入っていて、彼らに少なからず期待していると思われる女性から、あまり勉強しすぎてはいけない、むしろ「人生を楽しむ」べきだと彼らは囁かれるのである。この親切そうな忠告の裏には、もちろんまったく意識されていないにせよ、女のある予感が潜んでいる。男が性的なこと以外に興味を持ちはじめや否や、自分は性行為という唯一の任務に失敗し、もはや存在できなくなり、その性もろともあらゆる存在意義を失ってしまうのではないかと、女は感じているのである。

女性みずからこういう点を改める日が来るかどうかは疑問である。女性がかつてはそうではなかったというのも信じるに値しない。今日ではむしろ官能的な要素が以前よりも露骨に表に現れているかもしれない。「解放運動」における無数の出来事は、ただ母性から売春への移行を求めた結果にすぎないのである。この運動は全体として、女性解放というより売春婦の解放であり、その実際の結果からとりわけ顕著になったのは、女のなかの高級娼婦じみた要素がこれまでに以上に大胆に現われてきたことである。これまでと異なるように思われるのは、男たちの態度のほうである。社会全体のユダヤ化の影響もあって、男たちは今日では自身の内なる女の価値基準に従いかねないし、それどころかみずからそれを内面化しそうになっている。男の純潔はいい笑いのものになり、もはやけつして理解されない。男は女をもはや罪とは思わず、運命だと感じる。男が自分の情欲を恥じることがもはやない。

放蕩三昧の生活への欲求、カフェで弄ばれるディオニュソス的なものの概念、オウイデイウスのな面にかぎったゲーテ崇拜——こうした現代の性交文化全体がいったいどこから生じているのか、今ならわかるだろう。純潔の価値を信じていると告白する勇気がいまだにある男はほとんどいないし、ほとんどだれもが、それなら放蕩者のふりをするほうかもしれません。性的放埒は最も人気のある自慢話の種であり、それどころか性が貴重な体験だと見なされている

ため、自慢をしてもそれを信じてもらうだけで一苦勞だというほどである。それに引きかえ純潔はほとんど見向きもされず、あろうことか真に純潔な男が女たらしのふりをするのがよくある。恥じらいを知っている人は自分の恥じらいすらも恥じる。たしかにそのとおりだが、今日の恥はそうした恥じらいとは異なる。それは愛する男の恥じらいではなく、女の恥である。まだ男を見いだすこともなければ、異性から価値を与えられてもない、そうした女の恥である。それゆえ男は互いに、自分が性的機能を行使するさいにはどれほど忠実に、どれほど義務としての悦びを得てそれをおこなっているか、ひけらかそうとする。かくして今日男らしさを決定しているのは、その本性からして男の性的側面しか評価できない女なのである。女の手から、男たちは自身の男らしさの尺度を受けとっているのだ。かくして寝た女の数、「愛人」、「娘っ子」は實際、ある男がほかの男から認められるための資格証明となつたのである。だがそれではない。そんなことがまかり通れば、男は存在しなくなるのだから。

そうでありながら、処女性を高く評価する価値観はすべて元はといえば、男に端を発していた。もし男がまだ存在しているなら、いまでも端を発していると言えよう。それは男に内在する、染みひとつない純粹さという理想を、愛の対象に投影したものである。この点に坎してだけは俗説に惑わされてはならない。処女性が重んじられるのは、たちまちのうちに親しげな馴れ合いへと変質してしまう接触への不安や恐怖のためでもない。性的願望のヒステリックな抑圧のためでもない。さもないと貰い手がなくなるから、肉体的な純潔を求める男の要求に従わなければならないという外的な強制のためでもない。かといって、女性がよく長いあいだ、自分に最大の価値を与えてくれる男をじつと待つときのような、価値を受けとりたいという欲求のためでもないのである（そのような娘は自尊心が強いと一般には思われているが、まったくの逆である）。女性自身が処女性についてどう考えているかについては、言うまでもなく最初からほぼ答えは出ている。女性の最大の目的は、性交によって自身の存在を獲得するだけでなく、性交一般を招き寄せるこ

とであるという認識を思いだせばいい。たとえその人個人としてはまだ官能の悦びに興味がないように見えるとしても、女性性は性交を望み、それ以外のことは歯牙にもかけない。それについては、取り持ちが至るところで見られることからすでに証明したとおりである。

この問題についてさらなる確証を得るためには、女性がほかの女性の処女性をどのように見ているかを考察しなければならぬ。

そうすれば、結婚していない女性の境遇が女性たちからとても低く見られているとわかる。そう、女が否定的に評価するのは、本来的にはそうした女の境遇なのである。結婚さえしていれば、どんな女性であつてもひとまずは女性から評価される。たとえ「不幸にも」その女性の結婚相手が、醜く、弱々しく、貧しく、卑しく、横暴で、みすばらしい男だったとしても、ともかくも彼女は結婚していて、つまりは価値を、存在を受けとることができたのである。ごくわずかな間しか愛人としての満たされた暮らしができず、それどころか街娼にまで落ちぶれてしまったとしても、女としては、その人は老嬢よりも高く評価されるのである。正式な結婚にせよ内縁関係にせよ、長期にわたる関係にせよ束の間の情熱にせよ、これまで男と結ばれたことがなく、一人さみしく部屋で針仕事をする老嬢よりも。

だがかなり若い少女もまた、際立つて魅力的な容姿をしていても、女からけつしてその美しさのゆえに評価されることはない（女性は価値を投影することがないため、美しさを見いだす能力が欠けているのである）。少女が女から評価されないのは、彼女には男を虜にする見込みがあまりないからにすぎない。処女は美しければ美しいほど、ほかの女性たちにとつてより信頼できる約束手形になる。つまり取り持ち役としての女にとつて、男と女の繋がりを守るといふその使命ゆえに、美しい処女は価値あるものになる。女性が美しい少女を見て喜びを感じるのは、無意識のうちにそう考へているからにほかならない。評価する側の女がすでに男から自身の存在を受けとっていないと、その処女が競争相手

になつてしまふ。女は彼女に嫉妬し、彼女のせいで、価値を手に入れる闘いに自分が勝つ見込みが少なくなると感じるため、喜びなど感じる余裕はなくなるに違いない。だから女は男から存在を与えられて初めて処女が純粹に価値あるものと感ずることができるとだが、それについてはすでに論じた。おそらく女性たちはまず、みずからの取り持ちをしなくてはならない。取り持ち (kuppeln) はラテン語の copulare、つまりペアを作るといふ言葉から来ているが、まだ自分の取り持ちもしていない女性に、だれが取り持ちを期待したりするだろうか。

残念ながら「老嬢」を軽視することは一般的になつてしまつたが、いま述べたように、その傾向は完全に女に端を発するものである。男たちが年老いた未婚の女性について敬意を持つて語るのはよく耳にする。だが結婚しているにせよそうでないにせよ、女性や少女はだれでも、自分ではまったく意識していないだろうが、老嬢をひどく極端に軽んじるばかりである。機知に溢れ才能豊かだと目されていて、その美貌ゆえにじつに多くの人に賛美されていたある既婚女性が（この場合、だから嫉妬はありえないが）、いつだったか不器量な年配のイタリア人女教師をからかうのを聞いたことがあつた。わたしはまだ処女なの (Io sono ancora una vergine)、とその女教師が繰り返し自慢げに言つていた、といつて。かりに本当にそう言つていたとして、もちろんその女教師がおそらくただ強いられただけ状況を美德へと転化しただけであることは言つておかねばならない。しかしそうはいつても、どういう形であれ処女を捨てることができれば（そうすることで世間に顔向けできなくなつたりしなければ）、彼女はさぞ喜んだであらう。

最も重要なのは、女性たちは他人の処女性をあざけり笑うだけでなく、自分が処女という境遇にあることもひどく軽蔑することである（男たちに最も高く評価され、欲しいと思われる商品としてであれば、その場合に限つて処女性は無重される）。それゆゑ女性はまだで高い存在でも仰ぎ見るように結婚した女性を見るのである。女が内心でただけ性行為を重視しているかは、つい最近結婚した女性を幼い少女が心から敬うことからわかる。女性の存在の意味がそのと

き彼女たちに明かされ、その頂点へといざなわれたのだから。その一方で自分と歳の変わらない少女については、自分同様まだ女としての使命を果たすことのできない、不完全な存在だと見なすのである。

取り持ちという女の性質から、処女性の理想は本来男によってつくり出されたものであり、女によるものではないと推論してきたが、以上より、それがどれほど完全に経験と合致しているかを示すことができた。男は自分自身にも他者にも、とりわけ自分が愛する女には純潔を要求する。女は純潔でなくても平気で、男にも徳ではなく肉欲を望む。「模範生」を女性性は理解しない。それとは逆に、女性はずねに、数マイルも離れたところからドン・ファンのように誘いかけてくる男の腕のなかに飛びこんでいくことはよく知られている。女性性は男が性的であってほしいと望む。男の性欲によつてのみ、女性性は存在を与えられるからである。女性性は男の、距離現象としてのエロースさえ理解できない。女性にわかるのは、容赦なく欲望の対象を捕らえて我がものにするという面だけである。野蛮な本能がまったくない、あるいはほとんどない男が女性の注意をひくことはない。男が持つ高次のプラトニックな愛でさえ、女性にとっては基本的にあるがたくないものである。そうした愛は女性の心をくすぐるが、そんなものは女性にとって何の意味もない。跪いて捧げられる祈りが続くものなら、ベアトリーチェもしびれを切らしてメッサリーナと化すだろう。

性交は女をこの上なく引きずり下ろし、愛は女をこの上なく高みへと引き上げる。女が性交を望み愛を求めないという、ことは、女は引きずり下ろされたいと思うばかりで、引き上げられたいとは思っていないことの証左である。女性解放の究極の敵は女性自身なのだ。

快楽をもたらすから、低次の生におけるすべての欲びの原型だから——性交が非道德的なのはそれゆえにではない。快楽を不道德そのものだと見なす禁欲は、それ自体として非道德的である。それは正しくないものの基準を、行為に付随する現象やその外的な結果に求め、その行為の背後の考え方に求めるのではないからだ。禁欲は他律的である。人間

は快楽を追求してもよいのだ。地上での生をより楽に、より楽しくしようとしてもいいだろう。ただし、それにかまけて道徳の命令を犠牲にしてはいけないのである。だが禁欲している人間は、自分自身を鞭打つことによって無理やり道徳性をゆすり取る。その人は道徳性を、原因にたいする結果だと考えている。つまり道徳性とは、自分がたくさんのものを我慢した結果与えられる報酬であると思っているのである。それゆえ禁欲は原理的な観点ゆえに、また心理学的な氣質からしても非難されるべきものである。それは徳の成果とは関係のないものに徳を結びつけ、徳を原因にたいする結果と見なすのであつて、徳をそれ自体として、直接の自己目的として追い求めるのではない。禁欲は危険な誘惑者である。多くの人がいとまたやすくその欺瞞に足をすくわれる。快楽が法の道をはずれる最大の誘因であり、だから人間が快楽の代わりに苦痛を求めれば、より確実に正しい道に踏みとどまることができるようという誤った考えに陥りやすいからである。だが快楽はそれ自体として道徳的でも非道徳的でもない。快楽への意志が価値への意志に勝るときにのみ、人間は墮落するのである。

性交は非道徳的である。そのとき女を目的のための手段として扱わない男はいないし、そのとき自分および相手の人間としての価値よりも快楽を優先させない男もいないからである。性交のあいだ、男は快楽のために我を忘れ、そして女のことも忘れる。女は彼にとって精神的な存在ではなくなり、ただの肉体的存在になり果てる。男が女に望むのは子供が自分の情欲の充足のどちらかであり、どちらにおいても男は女を目的それ自体としてではなく、それとは別の意図でもって利用しているのである。ただこの理由（これ以外の理由はない）によつてのみ、性交は非道徳的なのである。

たしかに女性性は性交の理念の伝道師であり、この世のすべての物と同様に、いつも自分自身をその目的に供するための手段としてしか扱わない。女性性は快楽のための、あるいは子供を産むための手段としての男しか求めていない。そして男に目的のための手段として利用されることをみずから望む。物のように、対象のように、男の所有物のように扱わ

れ、男の好きなように變えてもらいたいと思つてゐる。だが他人の目的のための手段として扱われてよい人間はいない。それだけではない。女性が性交を本当に望み——自分にも男にも洗ひざらい打ち明けたりはしないが——男にそれ以外の何も求めないからといつて、それで女性への態度を決めようとしてはならないのである。たしかにクンドリーは自分の恋心にたいするバルジファルの同情を誘つた。だがまさにそこで、同情の道德が持つ弱点の全貌が明らかになる。それはたとえどんなに不当なものであるにせよ、隣人のいかなる願望をも叶えるよう強制するのである。論理的必然としての共感の道德や社会倫理はどちらもばかげてゐる。それらは（自分の内なる意欲にせよ、他人の意欲にせよ、社会の意欲にせよ）意欲が、當為を決定する——當為が意欲を決定するのではなく、それは道德の基準として、人間の具体的な運命を、具体的な幸福を、具体的な瞬間を選ぶのである——理念を選ぶのではなく。

それでは男は女をどのように扱うべきなのか。女自身が望むようにか、あるいは道德的理念が要求するようにか。女が望むように扱わねばならないとしたら、男は性交しなければならぬ（女は性交したがっているから）、叩かなければならないし（女は叩かれたがつてゐるから）、催眠術にかけなければならぬ（女は催眠術にかけられたがつてゐるから）、心にもないお世辞を言つて、女の価値自体をいかに軽んじてゐるか示さなければならぬ（女はお世辞を言われるのは好きだが、尊敬されることは望んでゐないから）。それとは逆に道德的理念が要求するように扱おうとすれば、男は女のなかに人間を見なければならぬし、女を尊敬しようとしなければならぬ。たしかにWはMの一機能、つまりMによつて生み出され、そしてMによつて消し去られることもできる機能である。それに女性はW以上の存在になることを望んでゐないし、Wとは異なるものになることも望んでゐない。インドでは、夫に先立たれた妻はみずから進んで焼死する。そう、このような死にまさに突き進むのである。だがそれゆゑにこの慣習は、最も恐ろしい野蠻以外の何ものでもない。

女性の解放は、ユダヤ人や黒人の解放と同じことである。これらの民族が奴隷として扱われ、つねに軽んじられてきた主な原因は間違いない、彼らの奴隷じみた資質にある。彼らはインド・ゲルマン語民族のように、自由への強い欲求を持ちあわせていないのである。今日のアメリカでは白人たちが、黒人を完全に分離する必要を唱えた。たとえ自由を手に入れても、黒人はそれを悪用するからである。それでも北部諸州とアメリカ連合国の戦争において、正義は完全に前者にあつた。これによつて黒人には自由が与えられたのである。ユダヤ人における、それにもまして黒人における、いや、さらにそれにもまして女における人間としての資質は、膨大な無道德的衝動という刻印を受けている。この場合、彼ら彼女らの資質が乗り越えなければならぬ障害はアーリア人の男よりも多い。だがたとえまだわずかなもののだとしても、その人間としての資質の名残をなお人間は尊重しなければならないし、こういう場合でもなお人間という理念（社会的なものとしての人間という意味ではなく、叡智界の一部としての魂を有した人間存在として）を尊重しなければならない。落ちぶれた最低の犯罪者であっても、法に代わつて暴力をふるうことは許されない。その人を私刑に処する権利を持つ者などどこにもいないのである。

女の問題とユダヤ人の問題は本質的には奴隷の問題であり、同じ方法で解決しなければならない。たとえそういう境遇にしかよるこびを感じられないとしても、何者も抑圧されてはならないのである。家で飼っているペットが自由を奪われることはない。ペットとして飼われる前から、動物は自由など持っていないからである。だがどれほどわずかなものであつても、叡智界の自由の最後の痕跡として、女性のなかにはなお、私は私だという感覚が眠っているのである。おそらく、完全な女というものが存在しないからであろう。女性たちは人間である。たとえ本人がまったく望んでいなくても、人間として扱わなければいけない。女性と男性は同じ権利を持つのである。

それなら女性にも同じように参政権を認めなければならないではないかと、驚いて反論してこないでほしい。実利的、

な観点から、こうした譲歩はおそらくさしあたり、もしかすると永遠に控えるべきだろう。倫理的原則が尊重されているニュージーランドでは女性にも選挙権が与えられたが、その結果は惨憺たるものであった。たとえ何かのほずみで数の上では同等、あるいは多数派になったとしても、子供や精神薄弱者や犯罪者が国家の運営に影響を与えることは当然許されてはならない。それと同様、女性もさしあたり、女性に関わるとかえって損なわれる恐れのある物事から遠ざけておいてよい。すべての人間が賛成するかどうかによつて学問の結果が変わることはないのと同様、女性が政治に参加するのに適格か不適格かについても、女性みずからが決定に加わらずとも、完全に正しく見定めることが可能である。それが権力の視点ではなく、まさに正当性という視点から決定されている以上、自分は損をしているのではないかと女性が必要はない。

だが、男女にはまったく同じ権利が与えられている。女性がなにかするのを、「女らしくない」からという理由で禁じようとしてはならない。卑劣としか言いようがないのは、まるで自分の法的な所有物であるかのように、姦通した妻を死ぬまで打ち据えた男に無罪判決が下ることである。女性は個として自由の理念のもとで判断されねばならないのであって、女性というカテゴリーとして、経験や男の愛の欲求から導き出された基準にしたがって判断されてはならない。たとえ女性みずから、そう判断されるにふさわしくない振舞いをしていても。

それゆえ本書は、女性にかつてない敬意を表している。女にたいしてであつても、男が取りうる道徳的態度はただ一つ。それは性でもなく愛でもなく——それらはどちらも女を他者の目的のための手段として利用するから——女を理解しようとする試み、ただそれだけなのだ。大部分の人間は、女というものを理屈の上では尊敬しながら、実際の女たちをそれだけ徹底的に軽蔑している。本書はその逆である。女というものが高く評価されることはない。だが、実際の女たちを尊敬するなどありえないと最初から決めてかかっているわけではないのである。

残念ながら、著名なすぐれた男たちであつてもこの問題にかんしては、じつに愚劣な考え方しかできなかった。女性解放についての、ショーペンハウアーやデモステネスの見解を思い出してみればよい。そしてゲーテもこう言っている。

いつもそうやって娘は仕事に勤しみ、人知れず

家庭的な美德に向けて成熟していく、賢い夫を喜ばせるために。

ようやく何かを読む氣になったとしても、手に取るのは料理の本だろう

モリエールも似たようなものである。

……女性の知性などいつだって、

精神の能力が高まり

半ズボンと胴衣を見分けられるくらいになれば十分だ。

男らしい女にたいする嫌悪を、男は自分のなかで克服しなければならぬ。そうした嫌悪は卑しいエゴイズムにはかからない。論理的かつ倫理的になることで女が男らしくなれば、もはや女を投影の受動的な基体 (Substrat)にとどめておくことはできないだろう。そして今日おこなわれているように、女性に男らしいことを禁じる規範を振りかざして、女性を男や子供の役に立つようにしか教育しないことに納得のゆく理由などない。

たしかに完全な女には道徳的になる可能性はない。だがこうした観念としての女を見ているだけでは、男が経験世界

の女を一人残らず手あたり次第にこの觀念に當てはめてゐることはまだわからない。女がますますこの觀念としての女に近くなつていくのを後押ししてゐるのは男だということについては、もつと知られてゐない。生きた人間の女のなかには理論上、依然としてカントのいう「善の胚珠」(ein Keim des Guten)が存在していると見なすことができる。それは、おぼろげながらも女が自分の運命を自覚するのを可能にする、自由な存在の残滓なのである。この胚種により多くのものが接ぎ木されるかどうかについて、それが不可能だと全面的に主張することは理論的に許されない。たとえば実際にはこれまで成功したためしがなく、未来永劫成功しなかったとしても。

この世界は道德的な理念のもとに存在している。たとへ動物であっても、現象(Phänomen)としては評価の対象となり、象は蛇よりも道德的だと見なされる。だが動物は、たとえば他の動物を殺しても個として責任を問われることはない。それにたいして女は我々から責任を負わされる。そこには、女に別様の存在になることを求める要請があるのである。女という性はおしなべて不道德である以上、女は女であることをやめて、男にならなければならない。

だが女は男に表面的に接近するだけで、つねに雪崩を打つて女の特性へと逆戻りしてしまう。もちろんここではそうした危険を細心の注意を払つて回避しなければならない。女性たちを真に解放し、恣意ではなく意志としての自由を与える企てが成功する見込みはきわめて少ない。現実の事態から判断すると、女性には二つの可能性しかないように思われる。一つは男によつてつくり出されたものを、自己を偽つて受け入れること。まだ根強く残つてゐる女性の本性全体と矛盾するものを自分は望んでゐるのだと思ひこむことで、女性は無意識のうちに自分を偽つて、まるで自分が道德的であるかのような顔をして不道德に憤慨したり、あたかも官能的でない愛を求めているようなふりをして淫らな行為に憤つたりするのである。もう一つは、女には男と子供しかないと開き直つて認めること<sup>(1)</sup>。そうすることで何を白状しているのか、またこの説明がどれほど恥知らずな敗北宣言であるか、女性たちはちつとも気づいてゐない。無意識に自分

を偽るか、冷笑的に本能と一体化するか。それ以外の選択肢は女には与えられていないように思われる。

だが重要なのは、女という性を肯定する、あるいは無視することではなく、それを否定し、克服することである。たとえばある女性が男の純潔を現実求めたら、その女性はもちろん女を克服したことになるだろう。そういう女性にとって性交はもはや最高の価値ではないし、性交を招き寄せることも最終目的ではないのだから。だが、まさにそこなのだ。そうした声がそこかしこで実際に上がっているとしても、その要請が真正なものであることを信じることはできない。男に純潔を求める女は——ヒステリーの場合を除けば——そうすることで自分自身を否定し、自分の価値と存在を徹底的に奪われることすらもはやわからないほど、愚かで真実が見えないのである。そうなるとどちらをよしとすればいいのか、もはやほとんどわからなくなる。自分とはまったく無縁の禁欲的な理想を高く掲げることのできる底なしの虚偽か、あるいは札付きの放蕩者を恥ずかしげもなく賛美し、その男に簡単に体を捧げる開き直りか。

だが女性がそのどちらを、実際に望もうと、その望みはすべて同じように男に罪を負わせることに向けられているのだから、ここにこそ女性の問題の核心がある。そのため女性の問題は、人間の問題と重なってくるのである。

フリードリヒ・ニーチェはある著作のなかでこう言っている。「男と女」という根本問題を捉え損ねること。つまり男女のあいだにはきわめて深い溝が横たわっていて、永遠に敵対しつづける避けがたい緊張があるのを否認すること。もしかするとさらに男女に同じ権利、同じ教育、同じ要請と義務を与えんと夢想すること——それらは浅薄な頭脳の典型的のしるしである。この致命的な箇所で自分の浅薄さを——本能の底の浅さを——露呈した思想家が総じて怪しまれ、さらには正体見たりと思われるのも当然である。おそらくその思想家は、生の、ひいては将来の生のあらゆる根本問題にたいしてあまりに〈近視眼的〉で、いかなる深みへも降りていくことができないだろう。それにたいして、欲望においても精神においても深みに達している男、厳格で情け容赦ないためよく誤解されるが、好意の深みにも達してい

る男は、女についてつねに東洋風に考える。そういう男は女を所有物、それも鍵をかけて守ることのできる所有物として、つまり所有者に奉仕するよう定められ、奉仕のうちに自己完結するものとして考えざるをえない。つまりここではアジアの途方もない理性、アジアの本能優位に立脚せざるをえないのである。アジアの最高の継承者にして一番弟子であるギリシア人がかつてそうしたのと同様に。よく知られているように、ホメロスからペリクレスの時代まで、文化が発展し、勢力を広げていくとともに、女にたいする態度もしだいにより厳しく、とはつまり、より東洋風になっていったのである。これがどれほど必然的なことか、どれほど論理的に当然なことか、どれほどそれ自体人間にとって望ましいことか、心のなかでとくと考えてみるがいい！」

個人主義者のニーチェが、ここでは徹頭徹尾社会倫理的な考え方をしている。よくあることだが、ニーチェはカースト理論、集団理論、隔離理論でもって、自身の道徳の教義の自律性を侵してしまふ。彼は社会のために、だれにも邪魔されない男の安寧を守るために、女性を権力関係のなかに置こうとするのである。そうすればたしかに女性解放への欲求を口にすることはほとんどないし、今日の女権論者——彼女たちは、女の不自由はどこに根ざしているか、そしてその理由は何かまつたくわかつていない——が言うような嘘偽りの自由の要求さえもはや掲げることはないだろう。だがここでニーチェを引用したのは、彼の思想の矛盾をあげつらうためではない。ニーチェの言葉とは反対に、女性の問題の解決なくしては人間の問題は解決できないことを示すためである。男は女性をその理念のために、その可想体(Noumenon)のために尊敬しなければならぬし、女性を別の目的のための手段として利用してはならない。それゆえ女性に自分自身と同じ権利を、だが同時に同じ義務(道徳的かつ精神的な自己形成)を認めなければならない——そういう要求はあまりにも厳しすぎると感じる人は考えてみるがいい。女性を享樂のための手段として利用することで、女性のなかに人間の理念があることを繰り返し否定するなら、男は自分自身、倫理的問題を解決できない、ということ。

アジア的考え方においては、性交とは、女性の抑圧にたいする男の贖いである。おそらくその代償に、じじつ女性はいつも最低の奴隷のくびきに嬉々として繋がれている。だがいくら女性がそういうものだとしても、男は同じ土俵に上がってはならない。そんなことをすれば男のほうまで道徳的に墮落してしまう。

人間の問題はそれ自体構造的なものである。男だけでそれを解決するのは不可能である。たとえ救済したいのが自分だけだとしても、女性もこの問題の解決に同行させねばならない。女性が結婚を求めてきたら、男はその不道徳な下心を捨てさせようとしなければならない。女性は心の底から誠実かつ自発的に性交を断念しなければならない。もつともそれはつまり、女が女として滅びなければならぬということなのだ。そうしない限り、この世に神の国を打ち立てることはできないのである。それゆえピタゴラス、プラトン、キリスト教（ユダヤ教とは逆に）、テルトゥリアヌス、スウィフト、ヴァーグナー、イプセンは女の解放と救済を支持したのである——ただしそれは、男からの女の解放ではなく、女からの女の解放である。そのような人物と連帯すれば、ニーチェの呪いなど吹けば飛ぶようなものでしかない。

だが女が自分の力だけでそうした目標に到達するのは困難である。女のなかの弱々しい火花は、男の炎によって繰り返し燃え立たせなければならぬだろう。つまり模範となるものがなければならぬのである。男のための女として存在するのをやめなければ、女は女をやめることすらできない。クンドリーをクリングゾールの呪いから真に解放できるのは、パルジファル、あの罪を知らない無垢な男しかない。かくして本書の心理学的演繹は哲学的演繹とも重なりあう。ここまでの議論が、いま述べたヴァーグナーの『パルジファル』、この世界文学のなかで最も深遠な作品とここで完全に一致するのである。まず男の性欲が、女に女としての存在を与える。あらゆる質料は、宇宙における罪の総計と同量の存在しか得られない。女もまた、男が自分の罪を完全に消し去るまで、男が自身の性欲を実際に克服するまでのあいだしか生きることができないだろう。

女性解放運動に反対する思潮すべてにたいする異論の声はとどまるところを知らないが、ただそう考えることによつてのみ、その声は封殺されるのである。彼らは言う。女はともかくそういうものとして存在していて、変えようがない。だから女と折り合いをつけるしかない。闘つて消し去ることなどできないのだから、女と闘つても何の得にもならない、と。だが、女性は存在しない、ということ、そして男が完全なたちでの存在だけを望んだとき女性は死ぬ、ということはすでに示したとおりである。闘いの相手となるのは、永遠に変わらない存在と本質を持ったものではない。それは破棄されるものであり、破棄されるべきものである。

女性の問題を理解した者に言わせれば、そうすることによつてのみ女性の問題は解決できるのであり、それ以外のやり方では解決できない。そんなことは不可能だと思われるだろう。その根本にある精神は常軌を逸していて、その要求は度を越していて、その要請は偏狭だと感じられるだろう。ただし、女性たちが話題にする女性問題は、ここではもはや眼中にない。ここで言っている女性の問題とは、女性たちが黙して語らない、永遠に沈黙せざるをえない問題である。それはつまり、性のなかに潜む不自由のことである。この女性の問題は両性の分化の時代に端を発し、人類と同じくらい古い。女性の問題への答えはこうだ。男は自身を性から解放しなければならぬ。そうすることで、そうすることによつてのみ、男は女性を解放する。男の純潔だけが——女性がそう思いこんでいるように、男の欲望がではなく——女性を救う。たしかに女性はその女としては滅びるだろう。だがそれはただ、灰のなかから新たに、若返った姿で、純粋な人間として甦るためなのだ。

それゆえ女性の問題は、男と女という二つの性が存在しつづけるかぎり残るだろうし、人間の問題より早くなくなることもないだろう。教父クレメンスの証言によれば、キリストはサロメにそういう話をしたという。のちのパウロやルターのように、性にたいして安易な粉飾を施すことなく。彼はこう言ったのである。「女たちが産みつづけるかぎ

り死は続くでしょう。そして二つのものから一つのものが、男と女から第三の、男でも女でもない同じ人間 (ein drittes Selbes, weder Mann noch Weib) が生まれて初めて、真実にまみえることになるでしょう」。

\* \* \*

かくしてようやく、人間の問題としての女性の問題という最も高次の視点から、両性にたいする節制の要請を完璧に根拠づけることができた。性交は健康に悪いという理由から節制の要請を導き出すのは浅薄だし、そういうことは肉体的代弁者たちに好きにだけ言わせておけばよい。また、快楽は不道徳だという理由からその要請を導き出すのも間違っている。そうすれば他律的な動機を倫理のなかに持ち込むことになってしまう。だがすでにアウグスティヌスは、すべての人間に純潔を求めたとき、そんなことをしたら近いうちに人間がこの世から消滅してしまうのではないかという反論にあわざるをえなかった。最も恐ろしいのは種が減びることだと言わんばかりのこの奇妙な懸念は、個人としての不死や道徳的個性の永遠の生をまったく信じていないことから来るものである。それは絶望的な不信心ゆえのものである。だがそれだけではない。それと同時に、群れの外で生きられない臆病も露呈するのである。そのように考える人は、人間が群れ集っていない世界というものを想像することができないし、死よりも孤独を恐れるのだらう。その人のなかで、それ自体として不死の道徳的人格が十分に力を持っていれば、人間の絶滅というこの帰結を果敢にも見届けることができるだらう。肉体的な死を恐れないだらうし、永遠の生が信じられないために、その代わりに種の存続を確信することもないだらう。性の否定によって死に絶えるのは肉体的人間だけである。そうしてようやく、精神的人間が完全な存在を手に入れるのである。

それゆえ、よく言われる種の存続というのも道徳的な義務にはなりえない。このような言い逃れは、じつに恥知らずな嘘から生まれたのだ。それが嘘であることは明々白々なので、あえてこう問うと笑われるかもしれないが、人類滅亡という大きな危険を回避せねばと思って性交した人間がこれまでいただろうか。生殖能力 (recondite) など、どれもただ吐き気を催すだけである。内心の声に耳を傾ければ、人類の存続のために努めるのが自分の義務だとはだれも思っていない。そして、自覚していない義務などそもそも義務ではないのである。

むしろ逆なのだ。人間がある原因にたいする結果にしてしまうこと、つまり、親の性交で生まれるという条件付きの存在として人間を生みだすことは非道徳的である。そして自由で自発性を持った人間が、最も根本的なところでは自由で制限された存在にとどまっているのはひとえに、このように非道徳的な生まれ方をしたからだ。人類の繁殖だけを目的とした理想的な性交というものを捏造することで、性交に道徳的聖別を与えんとする試みが時折なされてきた（むろん、性交は何としても聖別される必要があった）。だがそのようにいそいと飾り立てたところで、それが性交を擁護する十分な理由たりえていないことは明らかである。性交を許可し聖別するとされる動機は命令 (Gebot) ではないし、命法 (Imperativ) としては人間のどこにも見られない。子の同意を得たうえで父となり母となることなどできないのだから、それはむしろ道徳的に非難すべき動機でさえある。だが人為的に繁殖の可能性を断っている性交については、もともと説得力に乏しいこの弁護自体が意味をなさないのである。

つまり、性交はいかなる場合も人間の理念に反している。禁欲が義務だからではない。なんといっても性交のあいだ女は客体に、物になりたいと望むからである。そして男は実際に親切にも、女を心を持った生きた人間ではなく、ただの物と見なすからである。それゆえ、男は女をものにすると、すぐその女を軽蔑する。たとえ二分前にはまだ神のように崇められていたとしても、今はもう軽蔑されていることを女は感じとる。

他の人間のなかで尊敬できるのは、ただ理念だけ、人間の理念だけである。性交後、男が女を（そして自分自身を）軽蔑するのは、それが人間の理念に背いていることを示す最も確実な指標である。カントの人間の理念という言葉で何が言われているのか理解できない人は、せめてそれが自分の姉妹、自分の母、自分の叔母や従姉妹たちのことだと意識してみるのがいい。我々自身のためにも、女は人間として扱われ、尊敬されるべきなのである。そして性に必ず付いてまわるように、女は貶められてはならないのである。

だが、しかるべく男が女を尊敬しはじめるとすれば、それは女がみずから男のための客体であり質料でありたいと望むのをやめたときだろう。売春婦の解放以上の解放が、女にとって真に重要になったときだろう。女性の隷属の唯一の原因は何か、これまではっきりと語られたことはなかった。それは男根が女性に及ぼす、崇拜の対象となる専制的な力である。それゆえ女性の解放を心から求めたのはいつも男だけだった。さほど性的ではなく、愛も求めず、たいして洞察力があるわけでもないが、権利のために真剣になれる高潔な男たちだった。それは疑いようがない。このような男のエロース的な動機を美化するつもりはないし、「解放された女」にたいする男の反感を実際より低く見積もっているわけでもない。ゲートのように女に引き上げてもらうほうが、カントのように独りでたえず上昇を続けていくよりもずっと簡単なのだから。だが男が解放への敵意だと思っているものも、じつは解放の可能性への不信にすぎない。男は奴隷としての女を求めているのではない。男がずっと求めているのは何より、自分を理解してくれる同行者としての女性なのである。

女が今日受けている教育は、真の不自由に打ち勝とうとする決意を促し、その実現を図るものではない。母親の教育がいつも最終手段として用いるのは、自分の言いつけを守らない娘に、罰として「それじゃあお嫁に行けないわよ！」と脅しをかけることである。女性たちに施される教育が目標としているのは自分自身の取り持ちにほかならない。幸運

にもそれが成功すれば、女性の人生はそこで頂点に達するのである。男が教育の影響で変わることはあまりない。だが女の場合はそうした教育を受けることで今よりもますます女らしくなり、自立心がさらに失われ、より不自由になってしまう。

女の教育を女の手から取り上げねばならない。いや、人間すべての教育を、母の手から取り上げねばならないのである。

これが、女性が人間の理念に仕えるために最低限満たさなければならない条件であろう。そしてそれを妨害するのは、初めから女性だけだったのである。

\* \* \*

本当に欲望を断念し、自分の内部に安息の地を探し求めるようになれば、女性はもはや女ではなくなるだろう。その女性には女であることをやめ、外的な洗礼に加えて、ついに内的な洗礼を受けたことになるだろう。

いつかそんな日が来るだろうか。

たしかに完全な女は存在しない。だが、もしこの問いにそうだと答えるなら、それは奇跡は存在すると言っているようなものだ。

解放された結果、女が今より幸福になることはないだろう。解放は女に至福を約束してはくれないし、神への道はまだ長い。自由と不自由の中間にある存在は幸福など知らないのである。だが、奴隷状態から脱して不幸になる覚悟をすることが女にできるだろうか。

女性を聖なる存在にするというのではない。そんな話がすぐできるわけがない。できるのはただ、女が自身の存在はらむ問題に、つまり罪の概念に誠実に向きあうことができるか、少なくとも自由を欲するか、という話である。理想を貫き、導きの星を仰ぐことだけが重要なのだ。つまりは、女のなかに定言命法が息づくことはありうるか、女が道德的な理念、すなわち人間の理念のもとに身を置くことができるか、である。それだけが唯一女性の解放なのである。

〔原註〕

- (1) シラーが言うように、「遊戲をして初めて本当の自分になれる」のではない。
- (2) 両者は臆病という概念（ラテン語では *timor*）において通じるところがある。
- (3) 男のひげが女性に及ぼす影響は、考えられているよりも広範囲にわたって、男性器そのものが及ぼす影響と心理学的に酷似している（ただし程度としては劣る）。それには普通考えられているよりも深い理由があるのだが、ここではその詳細には立ち入らない。
- (4) 高次の生と低次の生の類比をさらに続けることもできよう。いかなる時代や地域においても息吹が人間の魂とことさら結びつけて語られてきたというのは、今日考えられているように、たんなる誤った表層的推論ではない。人間の魂が宇宙の縮図であるように——つまり人間の魂が万象との結びつきのなかで生きているように、息吹もまた、感覚器官よりはるかに普遍的に、生物と全世界のあいだを媒介して両者を結びつける。そして息吹が途絶えたと、低次の生も終わりを告げる。魂が永遠の生の原理であるように、息吹は地上の生の原理なのである。

(5) あらゆる個性は他者との繋がりに敵意を抱く。天才のように、個性が目に見える最高の形で発揮される場合には、性的なものにたいしてこのことが顕著に現われる。優れた人物、つまり芸術家のようにそれをオブラートに包んで述べることが出来る人間、哲学者のように限りなく多くのことを秘密にしておかねばならない人間——そのため彼らは情熱を持たない無味乾燥な人間だと思われるのだが——つまりこうした天才的人間は、性欲の発達した者に限って言えば、みな例外なしにきわめて強い性的倒錯に悩まされている(「サディズム」に苦しむか、あるいは間違いなく大半は「マゾヒズム」に苦しんでいる)。このことは、個性が他者との繋がりに敵意を抱くというテーゼによつてしか説明できない。そうした嗜好すべてに共通するものは、完全な肉体的繋がりを避けようとする本能であり、性交を免れたいという願望である。真に優れた人間で、性交のなかに動物的で汚らわしく、吐き気を催するような行為以上のものを見いだしたり、それどころか最も深遠かつ神聖な神秘を見いだして崇め立てたりするような人はけつして存在しないだろうし、存在するはずがないのである。

(6) 男の友情においては、友人どうしの壁を取り払うのはばかられる。女の友人のあいだでは、友情の土台として性的な親密さが求められる。

(7) そのような場合、きれいなほうの女性は、見映えがいま一つでたいして注目もされない女性にたいして、同情と輕蔑の入り混じった感情で接する。こうした感情や、自分の長所の引き立て役を手元に置いておきたいという思いから、きれいな女性の側もこの関係をより長く維持しようとしているのである。

(8) こういう話を、自然のすべてを包みこむことのできる男の能力と混同してはいけない。男は自然以上の存在なのである。女性は自然の一部としてそのなかにいる。そして自分以外の自然と、因果律に規定された相互関係にある。月と潮、氣象と雷雨、電氣と磁力に、女性は男よりもはるかに影響を受けやすい。

(9) 第十一章末尾を参照。かくして、高い精神性を持つ女性がなぜ両性愛者になるのかについても同様にわかる。つまり、そういう女性には男根の支配のもとでのみ生きているわけではないのである。だが女性の同性愛においてはヒステリーがかなり大きな役割を果たしているように思われる。

(10) そのような人物として、たとえばラウラ・マルホルムがいる。

### 〔凡例〕

1 原文で隔字体が用いられている箇所には傍点を振った。ボールド体で記されている箇所は太字で示し、それよりさらに太いボールド体が用いられている箇所はゴシック体を用いた。ただし、文全体が隔字体で書かれていて、一部隔字体でないボールド体を用いられている文については、文全体に傍点を振ったうえで該当箇所を太字にした。

2 ヴァイニンガーによる脚註は基本的にすべて訳出し、後註として付した。ヴァイニンガーによる後註は訳さなかった。ただし脚註であっても、『性と性格』内の関連箇所を示した註は、重要な箇所を除きすべて省いた。同じく、本文中で丸括弧で示された、『性と性格』の関連箇所への指示も翻訳では省いた。

3 括弧で括られた文中でさらに括弧を用いる場合は、すべて山括弧で記した。

### 〔解題〕

ここに翻訳したのは、オット・ヴァイニンガー『性と性格』——原理的研究(一九〇三年)の第二部第十一章、第十二章、

第十四章である。ただし、第十二章は紙数の関係で前半部を割愛せざるを得なかった。いずれ『性と性格』を全訳する機会に恵まれれば、割愛部もあわせて訳出してみたい。翻訳に際しては、初版のリプリント版である Otto Weininger: *Geschlecht und Charakter. Eine prinzipielle Untersuchung*. München (Mathes & Seitz Verlag) 1980 を底本とし、誤植等の疑いがあるときは Otto Weininger: *Geschlecht und Charakter. Eine prinzipielle Untersuchung. Dreißundzwanzigste unveränderte Auflage*. Wien und Leipzig (Wilhelm Braunnüller Universitäts-Verlagsbuchhandlung) 1922 を参照した。また、ドイツ語の意味の取りにくいつつは英訳版 Otto Weininger: *Sex and Character. An Investigation of Fundamental Principles*. Translated by Ladislaus Löb. Bloomington and Indianapolis (Indiana University Press) 2005 を適宜参照した。

世紀転換期ヴィーンのミソジニストとして悪名高いヴァイニンガーの名著を訳そうと思いつくには、二つの理由があった。ひとつには実際に読んでみて、知られざるヴァイニンガーの素顔をそこに見たように思ったから。もうひとつには、読むにたえる翻訳がこれまでなかったからである。

先に翻訳の話をしておけば、『性と性格』の邦訳はすでに三つ出ている。最初は片山正雄著『男女と天才』（大日本圖書株式會社）。原著出版から三年もたたない明治三十九年（一九〇六年）に出たが、これは訳者みずから「本書は原著の翻譯にあらずる」「梗概」なりと言うように、祖述に近い抄訳に留まった。次は大正十四年（一九二五年）に出た村上啓夫訳『性と性格』（アルス）。こちらは原著第六版にもとづく英訳“*Sex and Character*”（1906）からの重訳であり、依拠した英訳が片山訳と同じく抄訳であったため、同じく抄訳に留まった。三つ目が昭和五十五年（一九八〇年）に出た竹内章訳『性と性格』（村松書館）。ここではじめて全訳に近い訳が出たが、訳者みずから「訳文は必ずしも原文に忠実とはしなかった。省略も敢てした。明快に論旨を通す為には致し方なかった」と言っているように、これもじつは原文のドイツ語に縛られない「超訳」である。超訳ゆえ、たしかに明快とはいいたいヴァイニンガーの論旨を把握する

には有益であるものの、各章の具体的論述においては原著者の言っていないことが縷々書き連ねられるという事態が生じているし、重要な箇所が少なからず抜け落ちてもある。私たちは今年度前期の学部演習のテキストとして竹内訳『性と性格』を取り上げ、今回の翻訳の最終段階でも再度竹内訳を参照したが、その際ヴァイニンガーの錯綜する論理を骨太につかみ取る訳者の能力に何度も感嘆の声を上げつつ、しかし同時に、日本の読書人の多くがこの竹内訳『性と性格』を通してヴァイニンガーを読んでいるのかと思うと、やはり危惧の念を抱かざるを得なかった。これでヴァイニンガーの真意が伝わるか、日本にはたして真のヴァイニンガーは存在しているのか、と。その危惧の念を払拭するために、私たちはよりヴァイニンガーに忠実な翻訳を試みた。心がけたのは二点。いかにアクロバティックなドイツ語であれ文法上曖昧な点を残さないこと、そして、ヴァイニンガーの言いたいことが一読して不明な箇所では、それがわかるまで徹底的に考えること。今回の翻訳は、第一部と第二部をあわせて全二十章からなる大著の、わずか三章足らずにすぎない。しかし翻訳の結果見えてきたのは、これまで漠然と抱いていたヴァイニンガー像とは異なる、ヴァイニンガーの素顔だった。

従来のヴァイニンガー像を振り返っておこう。『青年の国』ドイツとトーマス・マン——二〇世紀初頭のドイツにおける男性同盟と同性愛(二〇〇五年)の著者福元圭太にとって、ヴァイニンガーの『性と性格』は「男性同盟、保守主義、ナショナリズムなどに共通する女性嫌悪のイデオロギーに論拠を供給しつづけた書物」であった。そこには「罵詈雑言とでも言うべき女性蔑視の言辞、女性の性格に関する数々の差別的形容」が溢れている——そう述べる福元は、具体例として『性と性格』からのおびただしい引用を添える。「女性は受け身で、攻撃されたいという欲求を持つ」「女性は性的で、夫と子供との関係に埋没しきっている」「女性は思考と感情を区別しない」「男性は意識的に生き、女性は無意識的に生きる」「女性に天才はいない」「女性には記憶力がない」「女性は嘘つきである」「女性は反倫理的なのではない、

ただ無倫理的なだけである」「女性は自我を持たない、魂を持たない、精神を持たない、人格も、自主独立性も、性格も意志も持たない」「女性は母か娼婦である」「男根は女性の運命である」「女性は無であり存在しない。存在の形式が与えられるのは男性の性的客体としてのみである」「女性は罪をおかすことはできない、彼女自身が罪なのである」「女性は性欲それ自体であり、男性を墮落させる」……。こうした言葉を読むと、誰もが『性と性格』は「女性蔑視」の書であると思うにちがいない。

『エリアス・カネッティ——生涯と著作』（二〇一九年）の著者須藤温子にとつても、ヴァイニングの『性と性格』は「世紀末ウィーンの文化的な女性嫌悪のステレオ・タイプ、性差別主義的なジェンダー・イメージを代表するテキスト」であった。須藤も福元に劣らずおびただしい引用を用いて『性と性格』がいかに「女性嫌悪」の書であるかを示そうとする。須藤の書の第一章「逃げゆく男——オットー・ヴァイニングの『性と性格』とエリアス・カネッティの『眩暈』」はこれまで日本で書かれた最も本格的なヴァイニング論であり、その批判の射程は、女性の特記記述における否定的表現に留まらず、ヴァイニングの思想の中枢にまで及んでいる。須藤によれば、女性問題の解決策としてヴァイニングが提示するのは、「女性が（人間）になること、すなわち女性の男性化」である。それが実現すれば、「男性性のみを持つ（完全な男性（M））からなる人類が誕生する」——須藤はそれを「男性—人間という単一性のユートピア」と呼び、この、女性のいなくなった世界には「もはや男性は存在しない」と宣告する。なぜなら、女性が存在しない世界には対概念としての男性もまた存在しないからだ。揶揄とも嘲笑ともつかないこの告発の根柢として引用されるのが、『性と性格』の次の一節である。

男性の性欲が、はじめて女性に女性としての存在を与える。[…:] 男性が自分自身の性欲を克服しない限り […:]

女性<sup>は</sup>は生き続けるだろう。「…」男性<sup>が</sup>が全き存在にのみなろうとすると、女性<sup>は</sup>はもはや存在せず、死滅するのは明らかである。「……」男性<sup>は</sup>は性から救済されねばならないし、そうすることではじめて女性<sup>を</sup>を救済できる。「…」当然女性<sup>は</sup>は女性として滅亡していく。だがそれは、灰燼のなから純粹な人間<sup>が</sup>が新たに立ち上がってくるためなのだ。「…」は著者、「……」は筆者による省略、傍線<sup>は</sup>は筆者

傍線を引いた「当然女性<sup>は</sup>は女性として滅亡していく」以下の元のドイツ語はこうである。Freilich geht sie, als Weib, so unter: aber nur, um aus der Asche neu, verjüngt, als der reine Mensch, sich emporzuheben. そして主語の sie は Frau である。つまりここでヴァイニンガー<sup>が</sup>が言っているのは、「たしかに女性<sup>は</sup>はそれで女<sup>として</sup>は滅びるだろう。だがそれはただ、灰のなから新たに、若返った姿で、純粹な人間として甦るためなのだ」ということであり、したがって須藤の言うように女性<sup>そのもの</sup>が滅びるのではなく、隔字体で強調された「女<sup>として</sup>」としての女性<sup>が</sup>が滅びるのである。須藤訳ではさらに「女性<sup>が</sup>が滅亡したあと、女性<sup>とは</sup>別の存在の「純粹な人間」——「完全な男性（M）」であろうか——が立ち上がってくるかのような印象を受けるが、そうではなく、「女<sup>として</sup>」としては滅んだ女性<sup>が</sup>が「純粹な人間」として甦るのである。だから「女<sup>として</sup>」としての女性<sup>が</sup>が滅びたからといって、「女性<sup>の</sup>男性化」が起こるわけでも「男性ー人間という単一性のユートピア」が成立するわけでもない。そのようなSFめいた反ユートピアとはまったく異なる次元で、ヴァイニンガーはここで〈新しい人間〉の誕生を思わせる宗教的なヴィジョンを提示しているのである。それを裏書きするように、ヴァイニンガーは次の段落で教父クレメンスの証言を引いてこう書いている。「二つのものから一つのものが、男と女から第三の、男でも女でもない、同じ人間（ein drittes Selbes, weder Mann noch Weib）が生まれて初めて、真実にまみえることになるでしょう」。須藤はこの一節を読まなかったのだろうか。

いや、そうではなからう。読んでも、両者の関連が見えなかったのである。この関連を読みとるためには、先の一節の意味を理解していなければならないが、須藤にはそれができなかった。須藤だけではない。竹内訳でも先の一節はこうなっている。「なるほどその成果は女性の消滅である。しかし安心していいだろう。それは純粹な「人間」を復活させるためのだから。灰燼の中から一人の真の「人間」が生まれて来ることをわれわれは期待しようではないか」(傍線筆者)。「女性の消滅」といい、女性と直接関連づけられていない「一人の真の〈人間〉」の誕生といい、その理解のレベルは須藤と大差ない。そして、教父クレメンスの証言の訳はこうだ。「二ツノモノガヒトツニナリ、男ト女カラ、男ニモナイ女ニモナイ第三の自我が出テクルコトガ大切デアル。眞実ハソコニアル」(傍点筆者)。両者の関連が見えない竹内にとって、「(第三の、男でも女でもない) 同じ人間」(Selbst) は「自我」(Selbst) と読み換えることも可能、取るに足らない存在だったのであろう。だがこの箇所は『性と性格』を書くヴァイニンガーにとって、先に述べた〈新しい人間〉の誕生という宗教的なヴィジョンを補足するきわめて重要な一節なのである。それまでヴァイニンガーに女性罵倒の根拠を与えてきた男女二元論の止揚がここにいたって要請され、女性が性的なだけの存在から脱却して「同じ人間」になることが求められているのだから。

なぜこのような誤読が生じるのであろうか。ひとつには、福元も須藤も竹内も、男の対義語としての女をあらわす言葉として「女性」しか用いていないことがあるだろう。じつはヴァイニンガーは『性と性格』において、女性を意味する言葉として W, Weib, Frau の三つを使い分けている。私たちの翻訳ではそれに対応する訳語として、W は「W」、Weib は「女」、Frau は「女性」と訳し分けた。W はヴァイニンガー独自の M/W 理論にもとづく概念的な女性要素であり、Weib/Frau に関しては使い分けの明確な基準が見えにくいものの、おおまかな指標をあげれば、Weib は M/W 理論にもとづく観念としての女、Frau は現実には生きている世俗世界の女と見なすことができる。今回の翻訳でいえば、第十一章

ではほぼそのように読めるし、第十二章ではややそれが見えにくくなるものの、第十四章では再びある程度明確にその使い分けがなされている。先に引用した〈新しい人間〉の誕生を求める一節にしても、「女性 (Frau) は女 (Weib) としては滅びるだろう」と言われていた。それを「女性は女性として滅亡していく」あるいは「その成果は女性の消滅である」と訳しては意味をなさない。

だが誤読の原因は、おそらくそれだけではないだろう。第十四章において、ヴァイニンガーはそれまでの一方的な女性蔑視の姿勢に距離を置いた論を展開しているが、『性と性格』を「女性嫌悪」の書と規定した人間にはそれが見えなかったのではないか。女性蔑視の姿勢がなくなったわけではない。たとえば、「女性は快楽のための、あるいは子供を産むための手段としての男しか求めていない。そして男に目的のための手段として利用されることをみずから望む」という、これまでも繰り返されてきた侮蔑的見解が見られる。違うのは、そのあとに次のような言葉が続くことだ。「女性が性交を本当に望み「……」男にそれ以外の何も求めないからといって、「だが他人の目的のための手段として扱われてよい人間はいない」。なぜなら、女性を快楽の手段とするとき、「女は男にとって精神的な存在ではなくなり、ただの肉体的存在になり果てる」からである。「女性たちは人間である。たとえ本人がまったく望んでいなくても、人間として扱わなければならない。女性と男性は同じ権利を持つのである」——女は性交しか求めていないと言って罵倒するのではない。たとえそうだとしても、精神的な存在にもなりうる同等の「人間」と見なそうというのである。さらに言われる。「我々自身のためにも、女は人間として扱われ、尊敬されるべきなのである」。女を対等の、それどころか尊敬すべき存在として捉えるこのような視線の延長線上に、先に述べた〈新しい人間〉の誕生という宗教的なヴィジョン——女としては滅びた女性が「灰のなかから新たに、若返った姿で、純粹な人間として甦る」——が語られるのだが、福元も須藤も、あたかも男女同権論者のような語りをする最終章のヴァイニンガーについては、なぜか触れようとしな

い。

このようなヴァイニンガーの転回は、しかし最終章で突然起こるのではない。まるでその予兆のように、それまでさまざまな側面から女を罵倒してきたヴァイニンガーが、第十一章にいたって唐突に「愛」について語り始めるのである。しかも、女性嫌悪の根源であった性欲の対立項としての愛について。「愛と性欲は異なった、絶対に両立しえない、それどころか対立する二つの状態であるため、本当に愛しているときには、愛する人との肉体的合一などまったく考えられないのである」——愛にまつわるこの性的潔癖さは、ヴァイニンガーの場合、ただ青年期に特有のものとして片づけるわけにはいかない。なぜなら、そこには「性的な引力は肉体が接近しているときに増すが、愛は相手が不在であるときに最も強くなる」という、十二世紀のトルバドゥールに淵源する〈遙かな愛〉(Fernliebe)を継承する想念が息づいているからである。はたしてヴァイニンガーは続いて「〈プラトニックな〉愛」への信仰告白をし、「ベアトリーチェへの愛」を唯一可能な愛のかたちとして讃美するのだが、これが女性蔑視者のすることだろうか。むしろ女性崇拜者の行為ではないか、と思われたのも束の間、ヴァイニンガーは奇妙な論理を展開する。「天使のように清らかな女」への愛は、価値ある存在としての自分の理想を投影したものにすぎない。自分が望んではいるものの完全には実現できない理想を、愛する女性に投影してその価値の担い手とすること——それが愛するという行為である、と。愛を性欲から分離し、その価値を称揚したはずのヴァイニンガーは、こうして愛をも否定する。男の性欲が快楽の手段として女性を利用したように、愛もまた自分の理想を投影する手段として女性を利用すると、ヴァイニンガーは言うのである。みずから見いだした愛の価値をこのようなかたちで否定する、自家中毒に陥ったようなヴァイニンガーの思考は、そして第十一章の末尾で不可思議な「神話」を創出する。受肉の際に男は魂という精神性を自分だけのものにして女には与えなかった。この仕打ちを男はいま女を愛することで償っているのだ、と。この神話は第十二章でも繰り返えされる。男はみずからの

性欲で女を創りだした。その意味で女とは男の罪なのであり、この罪を償うべく男がおこなうのが愛なのだ。「女を創造すること、つまり性交の肯定によって犯した罪、そして今もたえまなく犯しているその罪を、男は女を愛すること、償っているのである」。それはすなわち、みずからの罪の隠蔽に他ならない。

こうした愛の奸計をヴァイニンガーは許容しなかった。みずからの罪を隠蔽することなく女性を愛することはいかにして可能か——それが第十四章のヴァイニンガーの問いになる。その答えは、女性を性欲の対象にして快楽を貪るのではなく、愛の対象にして自身の理想を投影するのでもなく、「純粹な人間」として魅つた女性を自分の人生の「同行者」(Gefährtin)とすることだった。女性罵倒を繰り返しかえた果てにヴァイニンガーが探り当てたこの新たな愛のかたちについて、詳しくは翻訳を読んできたい。今回の翻訳でこの三章を取り上げたのは、第十一章から始まるヴァイニンガーの転回をこの結論に至るまで追いたかったからである。

微かな希望として遠望したこの新たな愛のかたちを現実のものとすることの困難を、だがヴァイニンガーは自覚していた。女性がもはや「女」であることをやめて、人生の「同行者」になる——「いつかそんな日が来るだろうか」。『性と性格』の末尾には、そうつぶやくヴァイニンガーの祈りにも似た希望と不安が記されている。そこに私たちは、性愛の汚れを拒否し、「染みひとつない純粹さ」という理想を追求した青年の魂のゆらぎを読み取ることができるように思う。『性と性格』は潔癖で超越的な精神を志向した青年の魂の記録である。いつたどり着くかわからない未来に向けて発信された、ユートピア的な〈愛の書〉である。「女性嫌悪」の書という偏見を捨ててもう一度この書を虚心に読めば、そこにヴァイニンガーの別の顔が見えてくるだろう。